

第124図 1・13号住居址

③4 13号住居址 (図124、写図44・46)

1号住居址の北東側40mほど離れた、農道入道洞線の道路敷から北側耕地にかかる、隅丸方形の竪穴式住居址で、昭和28年と30年の2回にかけて発掘調査された住居址で、道路際に竈が復原展示されている。長大な竪穴式住居址で、東西方向(長径)8.1m・南北方向(短径)7.2m・深さ80~95cmほどの住居址で、北西側壁際中央付近に、焚き口部幅90cm・長さ1.1m、煙道部1.5mほどの長大な竈で、現在のところ伊久間原遺跡では最大の竈である。復原工事の折に炉石を外したところ、両袖の石は3個づつで長さ45cmほどあり、支脚の石も35cmほどあった。検出された柱穴はP1~4で、径40~50cm、深さは82・87・66・75cmと深いもので、P2は二重構造である。中央付近に3個の平状石が検出されている。P1・2の間に10個の小ピット群がある。周溝はあったと思われるが検出作業が行われていない。床面は平坦で硬い床であった。南西の半分は昭和28年に、北東半分は昭和30年に発掘調査したもので、この図は合成したものである。床面全域に炭の堆積が多く、炭化材が多く出ている。長いものはPとPの間に横たわり、4m以上に及ぶものもある。屋根の支材と思われる炭化材が、北東側の壁に立ちその間隔を狭めながら東隅に重なっている。火災により建物が東側に倒れた形跡が伺える。北東側P3とP4の間に、かやの炭化物が発見された。古墳時代の集落の東端に近い位置にあり、昭和52年の記録によると、さらに東に1軒ある。長大な住居址の周りに、ほかの住居址がどう位置づくか、今後の課題でもある。

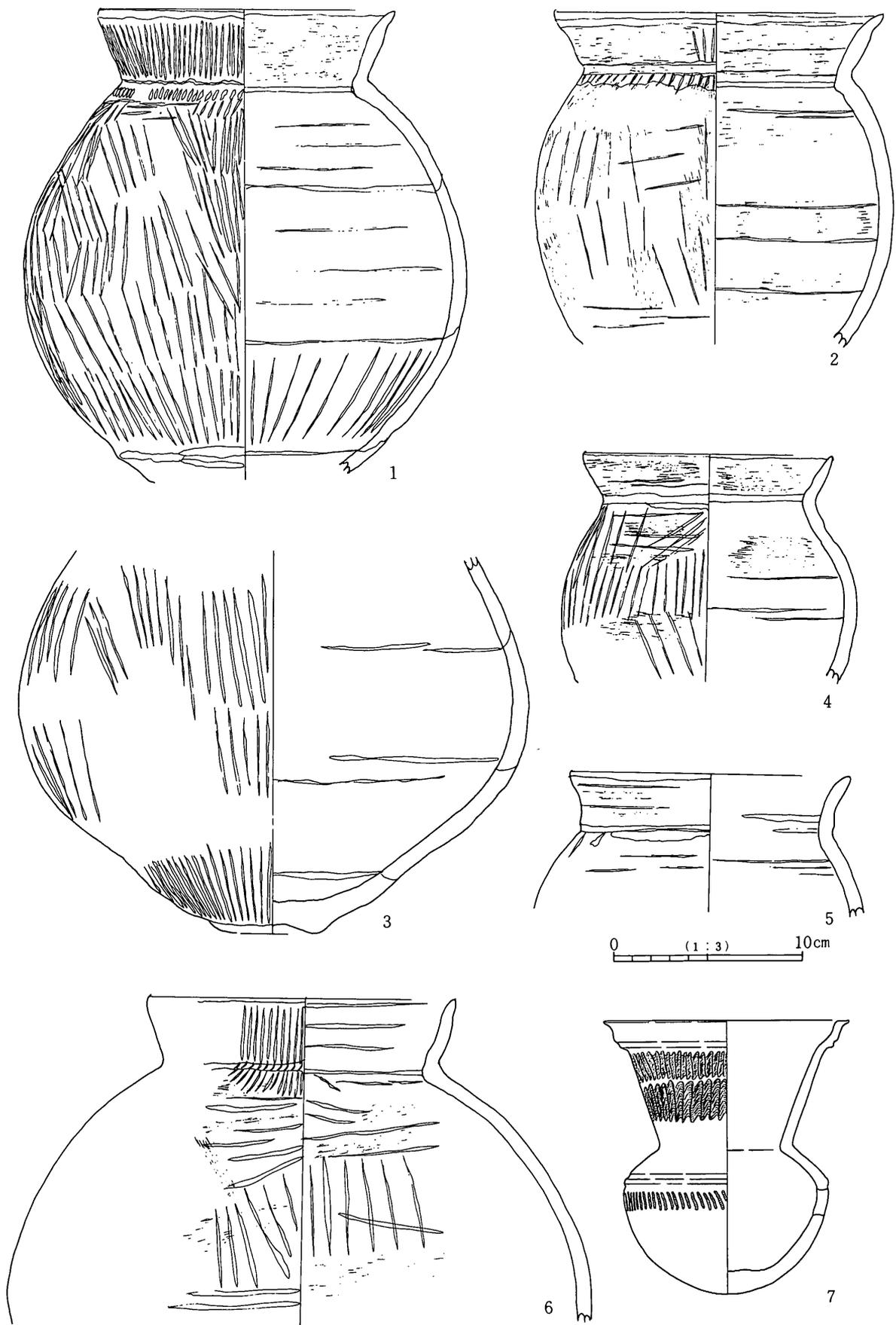
完形土器の数が多く、出土状況に特徴がある。南側の隅にほぼ11個・西側の隅に6個・北側の隅とその東側に7個、竈の周りに10個が記録されている。とくに興味深いことは、竈の両側に小形甑形土器と小形甕形土器が、甕形土器口縁部を挟んだ、三つ組の甑が出土している。当時の記録によると完形・半完形の土器は、甕形土器6・甑形土器5・小形甕形土器17・碗形土器3・坏形土器8・鉢形土器で合計42個ある。高坏形土器は一個も出ていない。この竈は、昭和33年に、喬木村教育委員会の手によって、復原され、覆い屋がかけられて、見学できるようになっている。(写図44)

(7) 古墳時代の掘立柱建物址

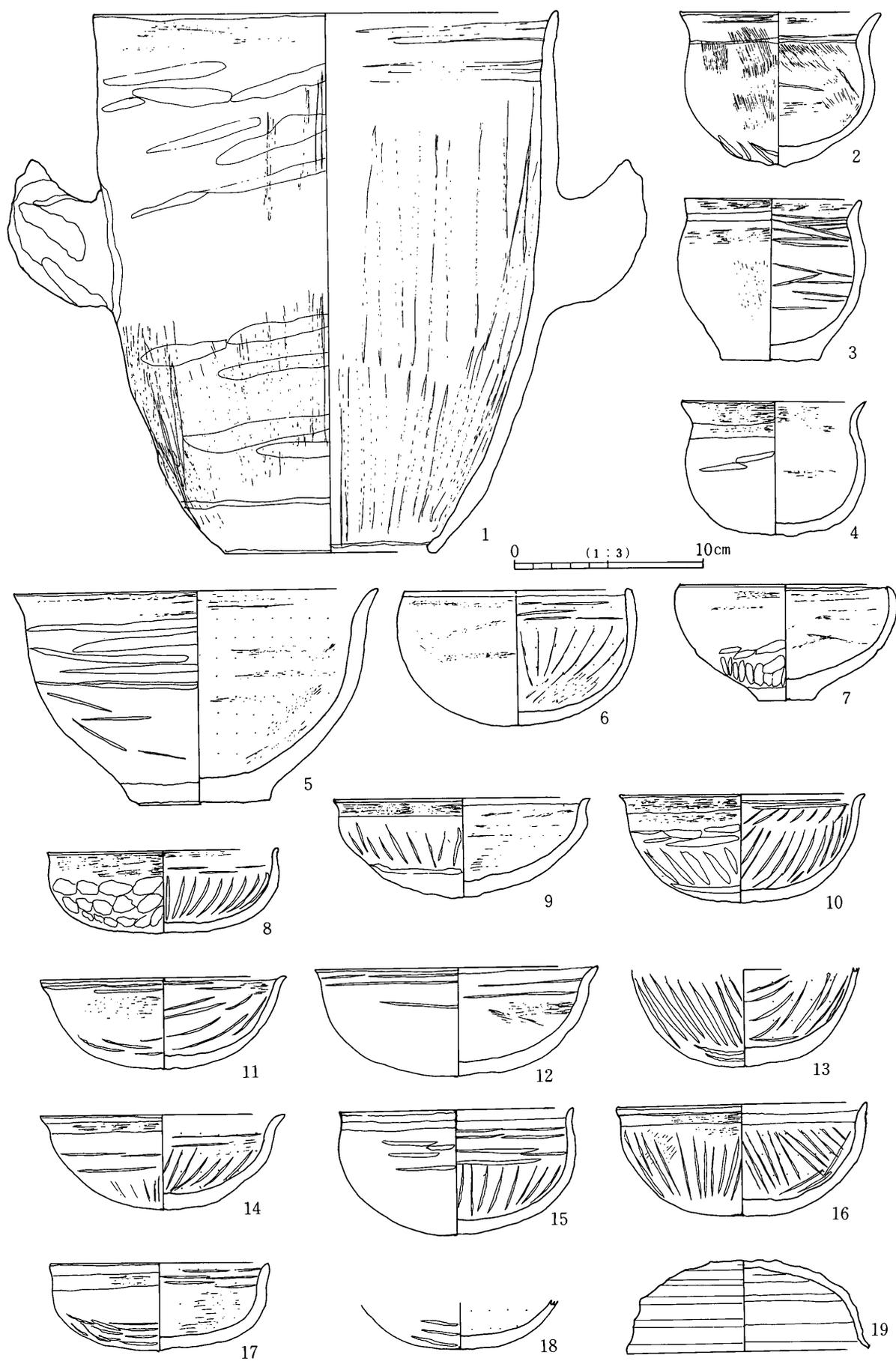
古墳時代の掘立柱建物址と思われるものは、住居址と直接かかわりのない位置に、ピットが方形配列または直列的に配列するものを挙げてある。登録した掘立柱建物址は21棟で、D1地区南で4棟、D1・2の境辺りで8棟、D2地区で4棟、D2地区南とD3地区で5棟ある。それらの地区の中で整った配列集団が検出されているところは、D1・2地区の境辺りの掘立柱建物址1・2・3・4・5・6・20・21と、D2地区の中央辺りから北側にかけての掘立柱建物址7・11・12・13・15を中心にしたところで、このグループを中心にして説明することにする。(以後、文中では建物址と略す)

① 掘立柱建物址 1 (図125、写図56)

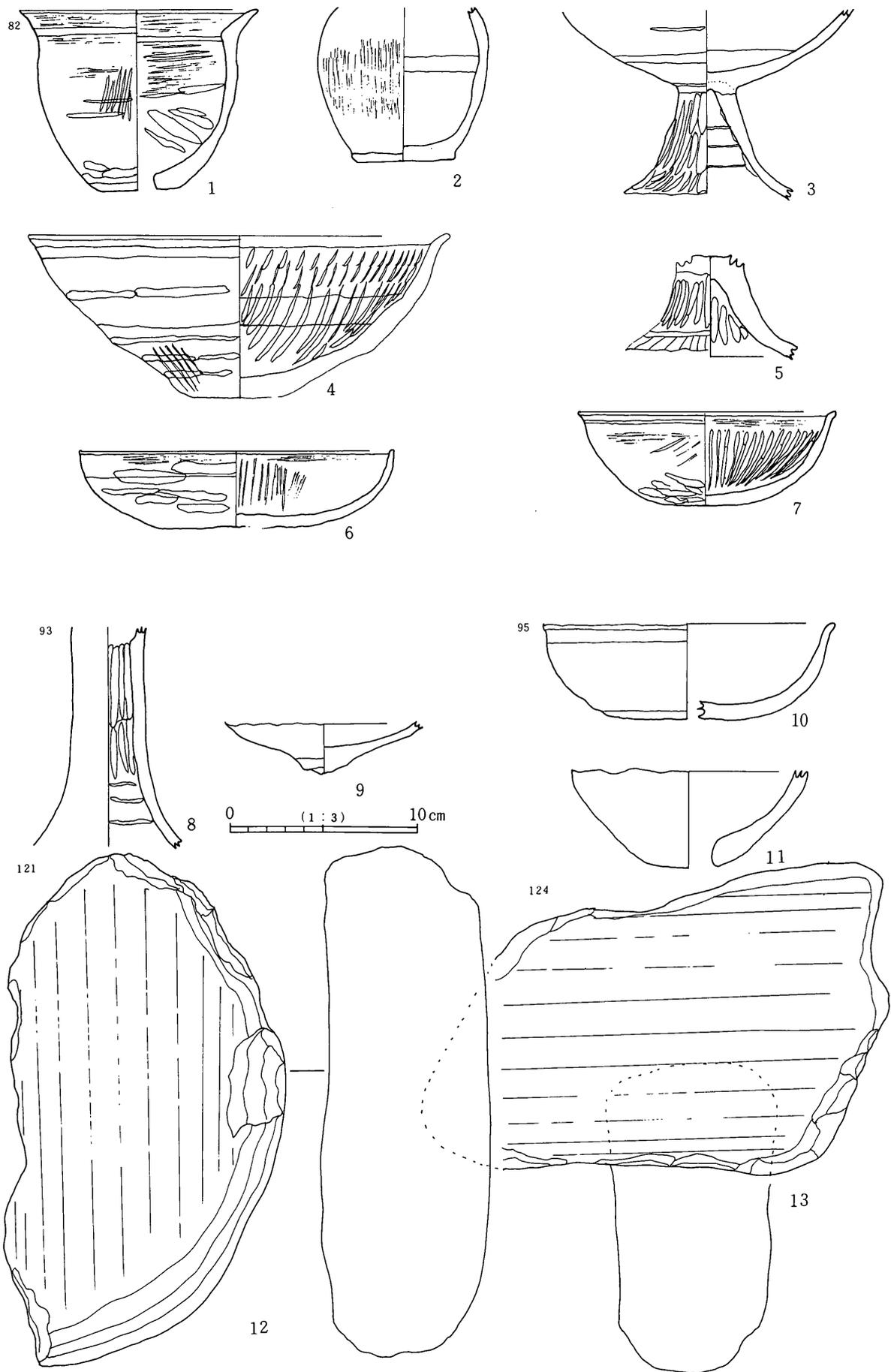
D1地区の北側、T~W列の西側で、用地外へ半分くらいかかる建物址かと思われる。D1地区全域では上層の調査中に広い範囲で、黒色砂質土の入ったピットが多く検出された。ピット群の配列を求めながら掘り下げる内に、茶褐色土の竪穴状の遺構が多くなり、中には縄文時代早期・前期の土器



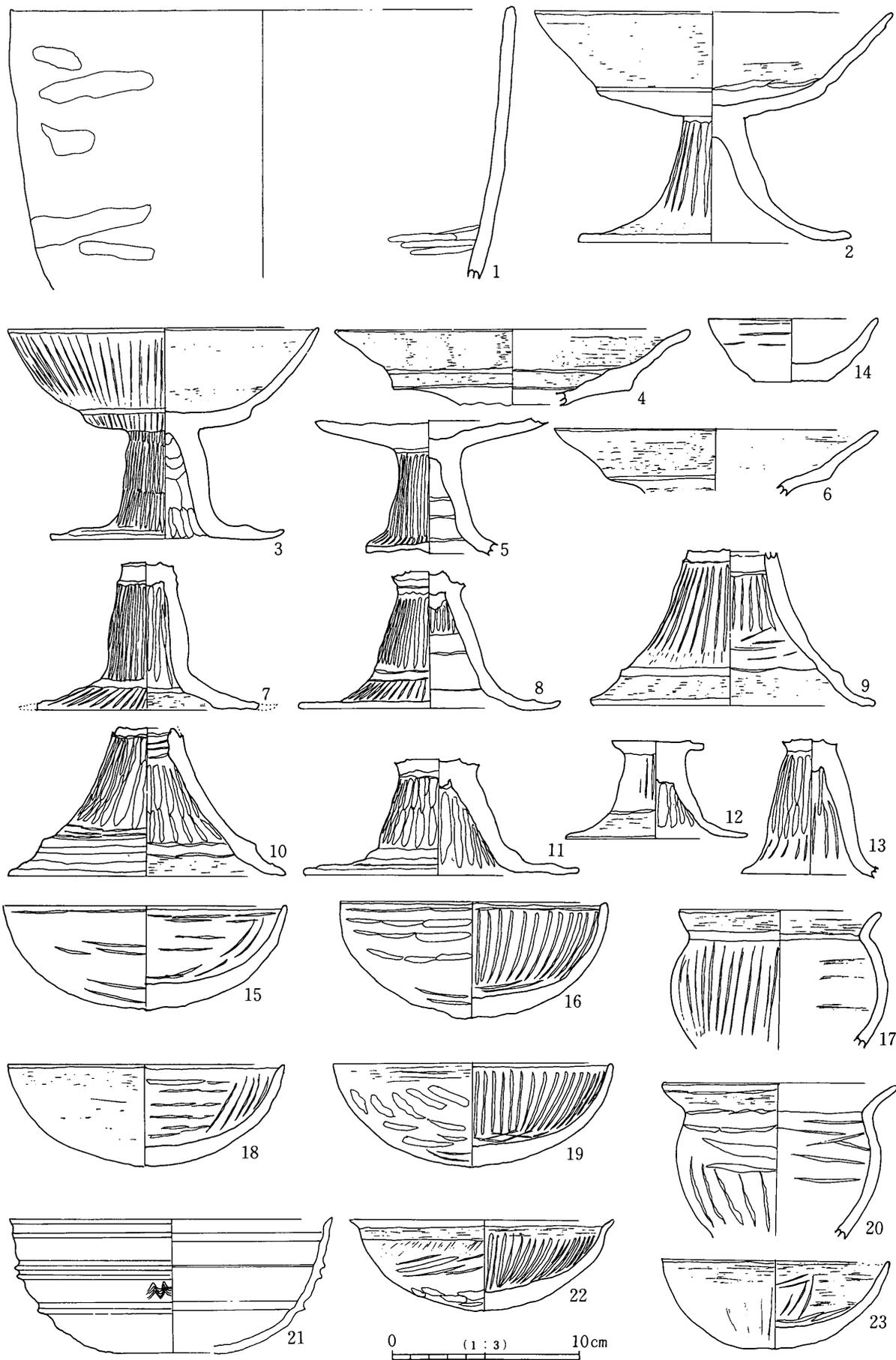
第128图 68号住居址出土土器(1)



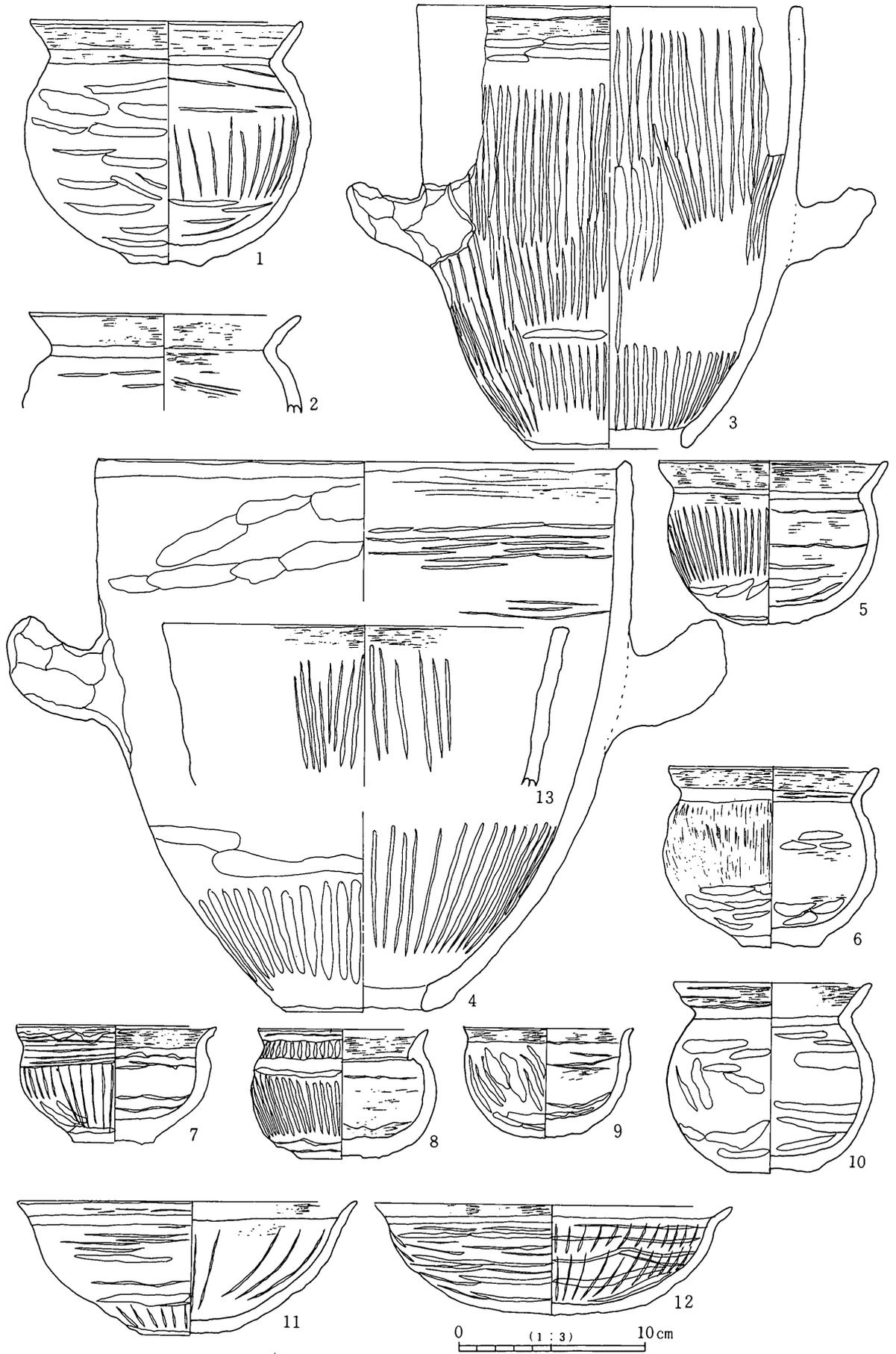
第129图 68号住居址出土土器(2)



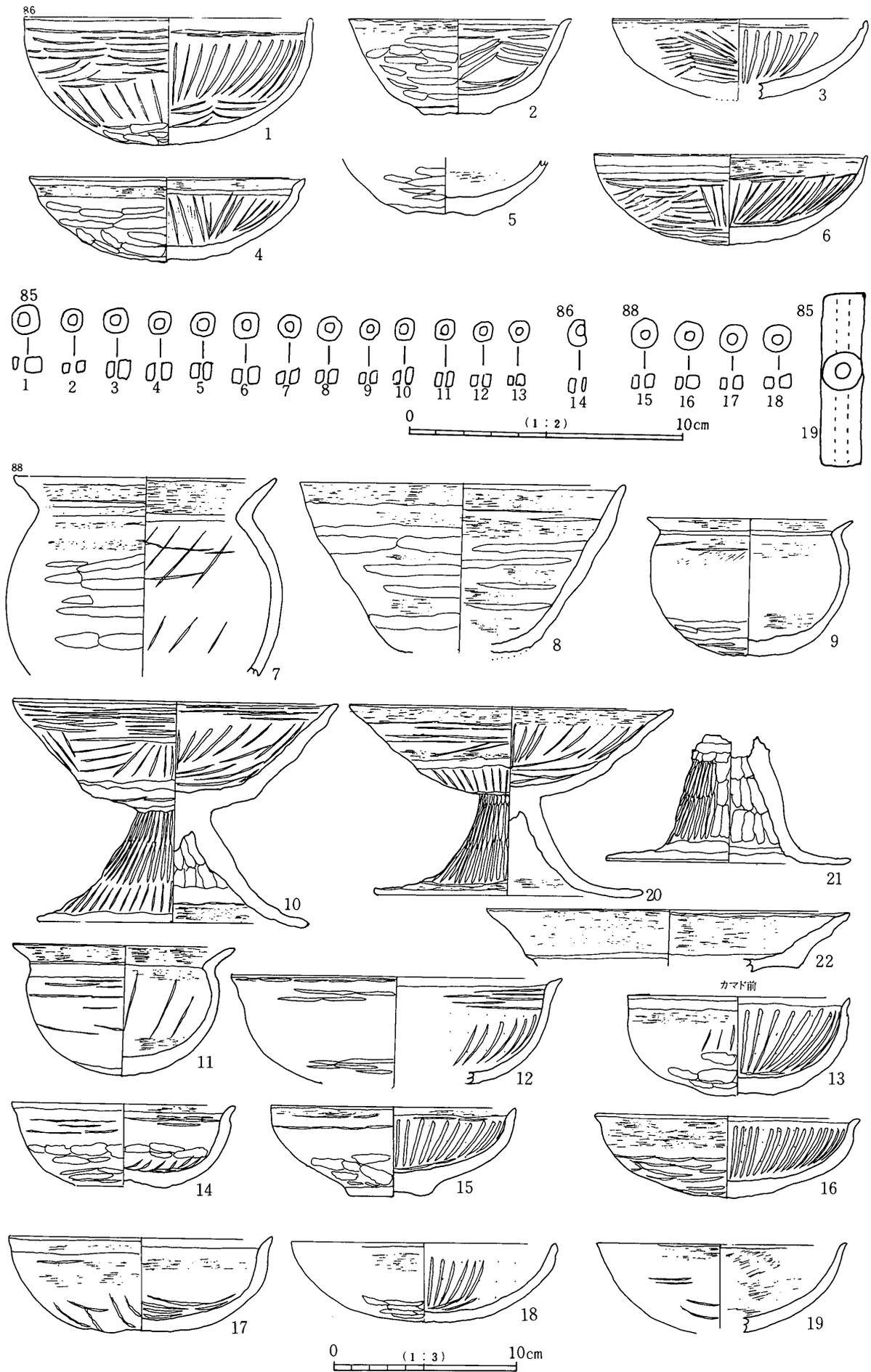
第130图 82·93·95号住居址出土土器、121·124号住居址出土砥石



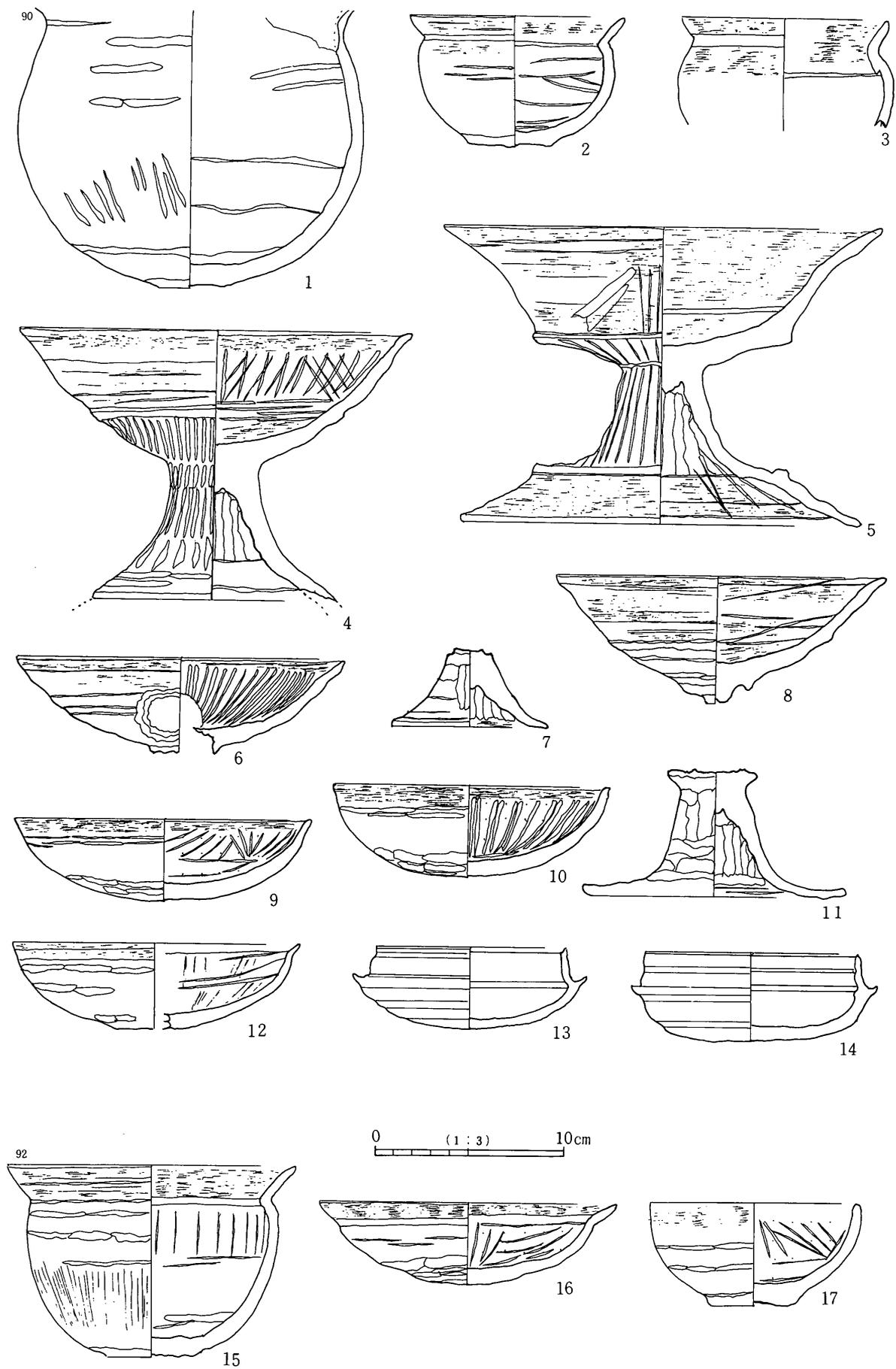
第131图 85号住居址出土土器



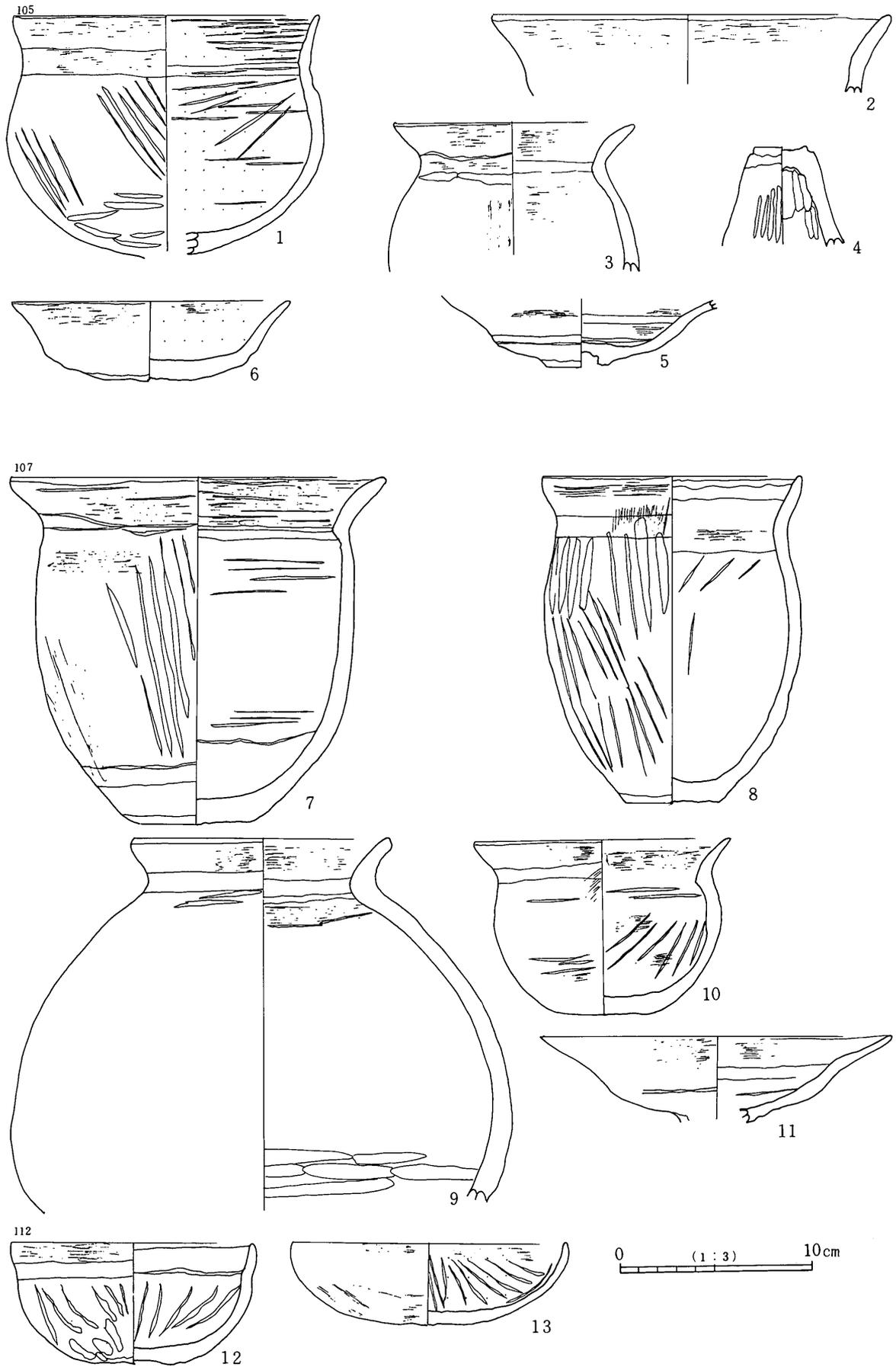
第132图 86号住居址出土土器(1)



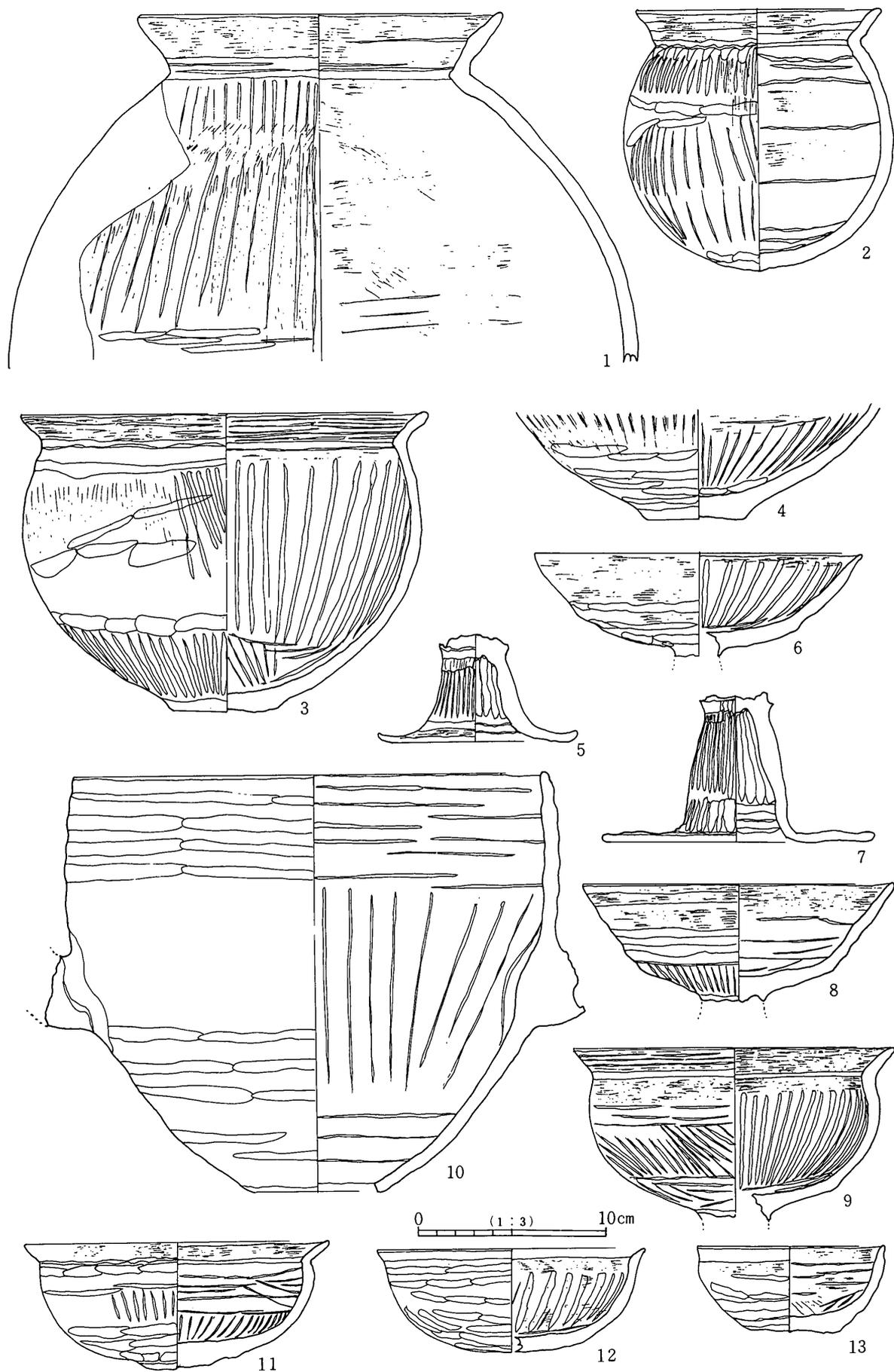
第133图 86(2)・88号住居址出土土器、白玉・管玉



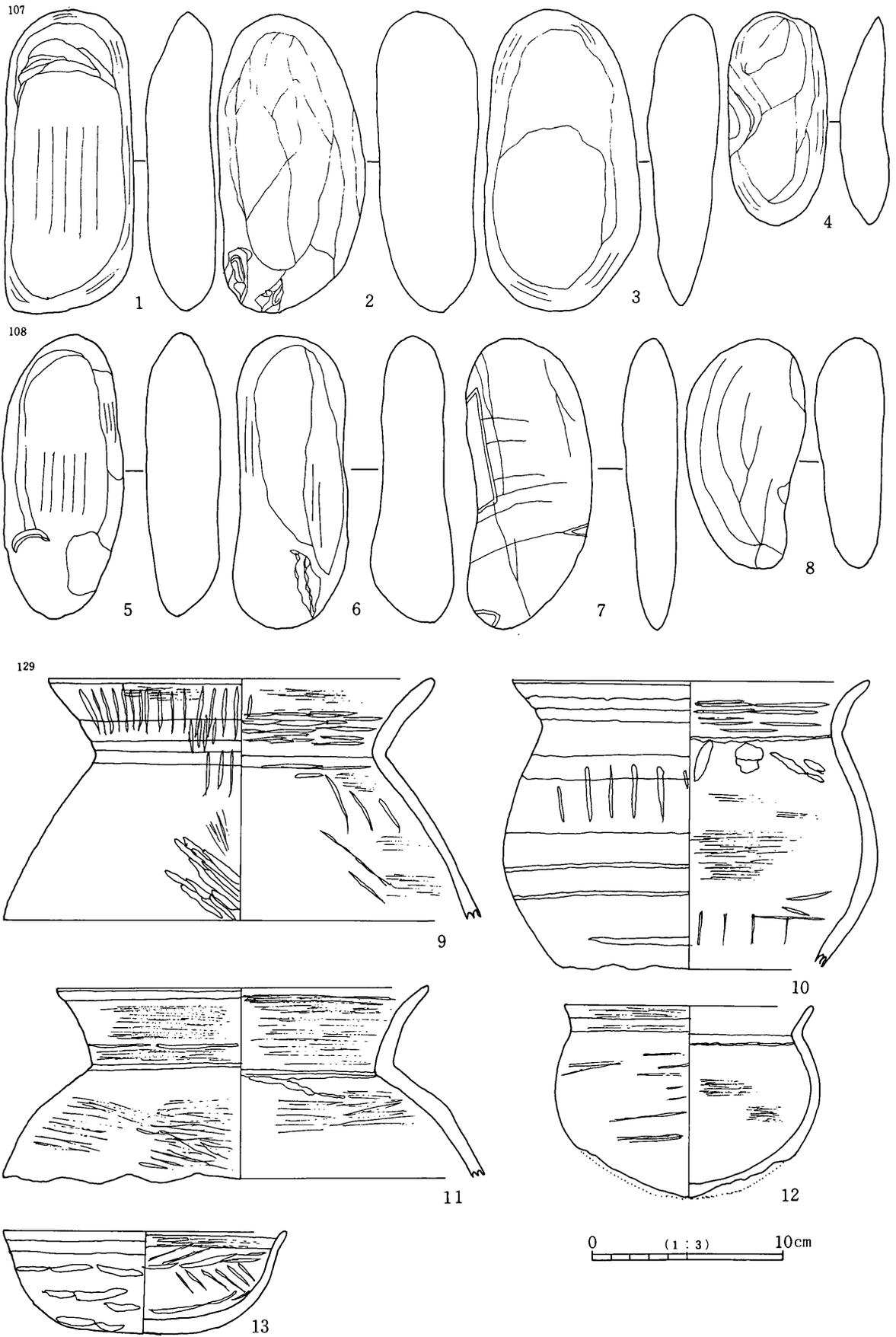
第134图 90·92号住居址出土土器



第135图 105·107·112号住居址出土土器

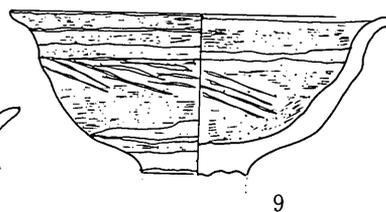
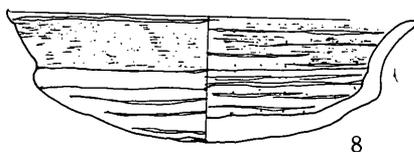
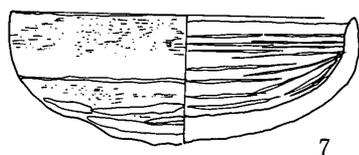
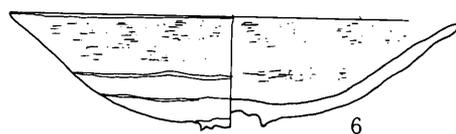
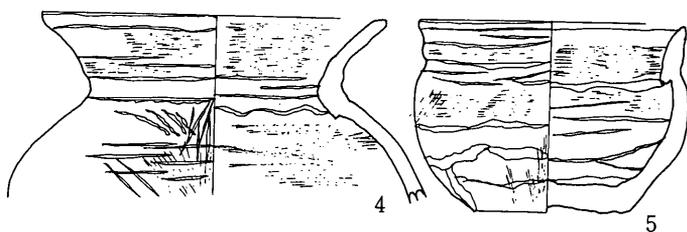
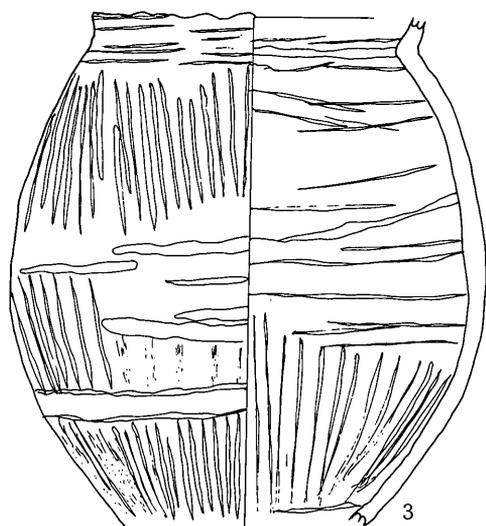
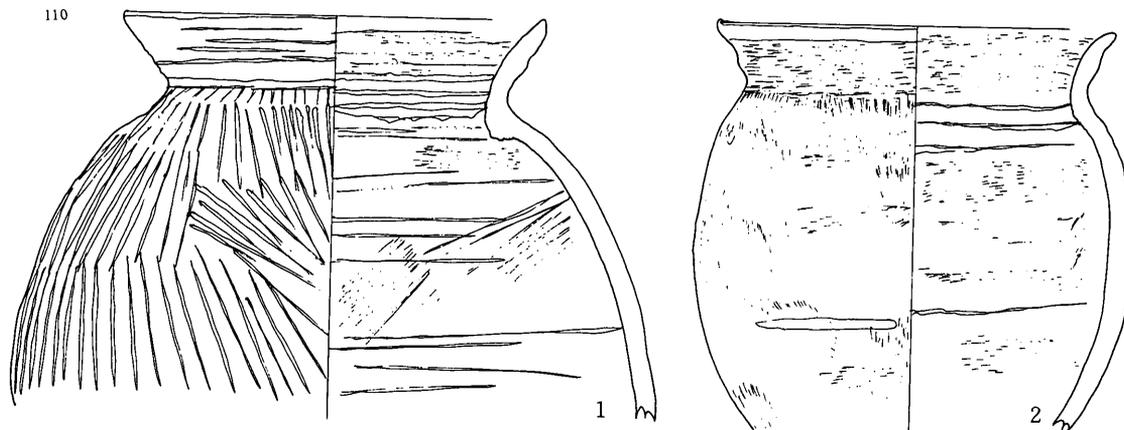


第136图 108号住居址出土土器



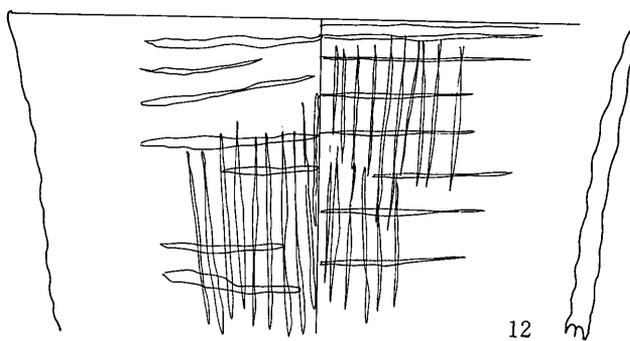
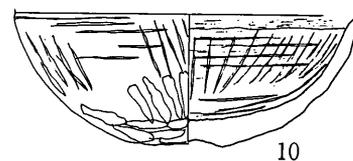
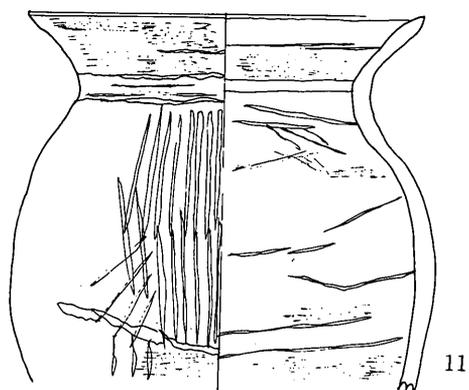
第137图 129号住居址出土土器、107·108号住居址出土砾手石

110



0 (1:3) 10cm

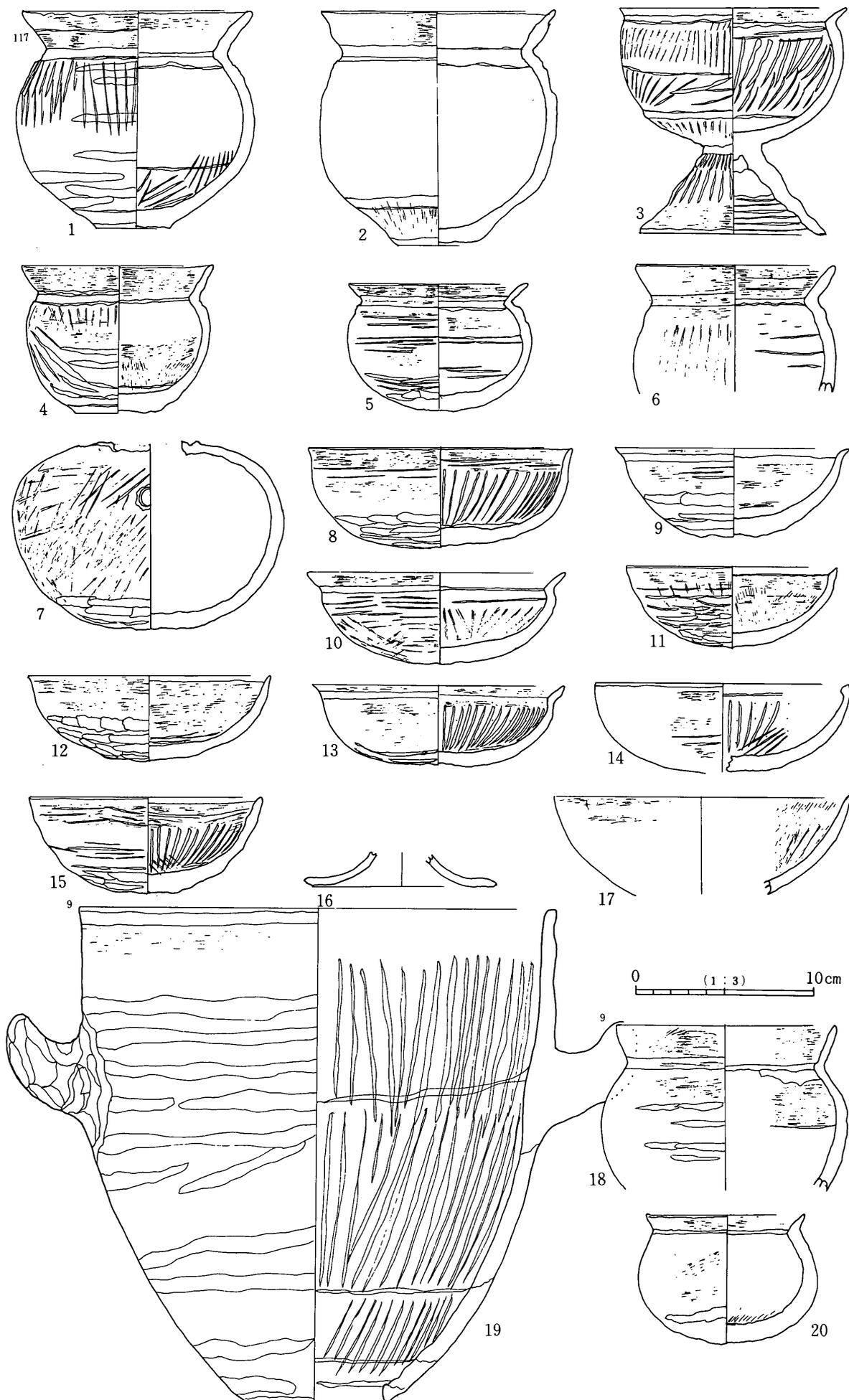
130



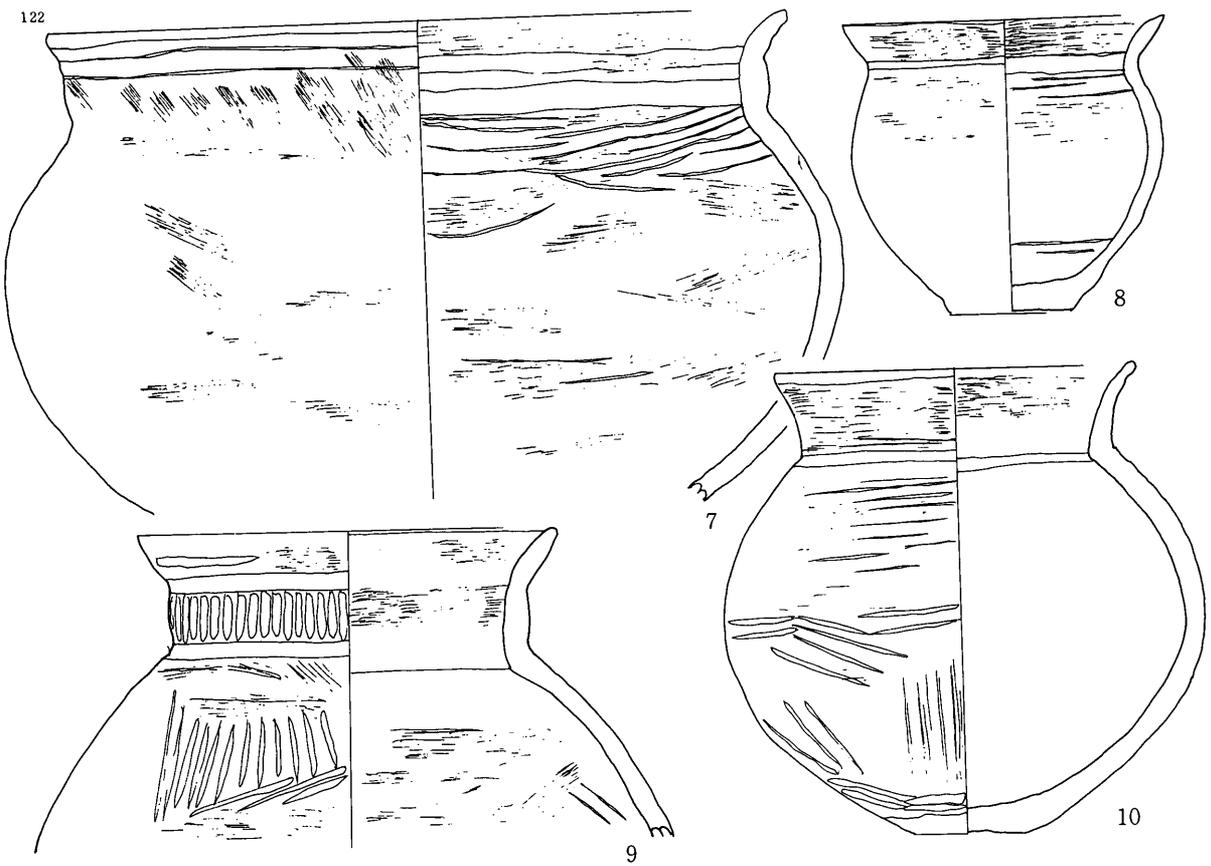
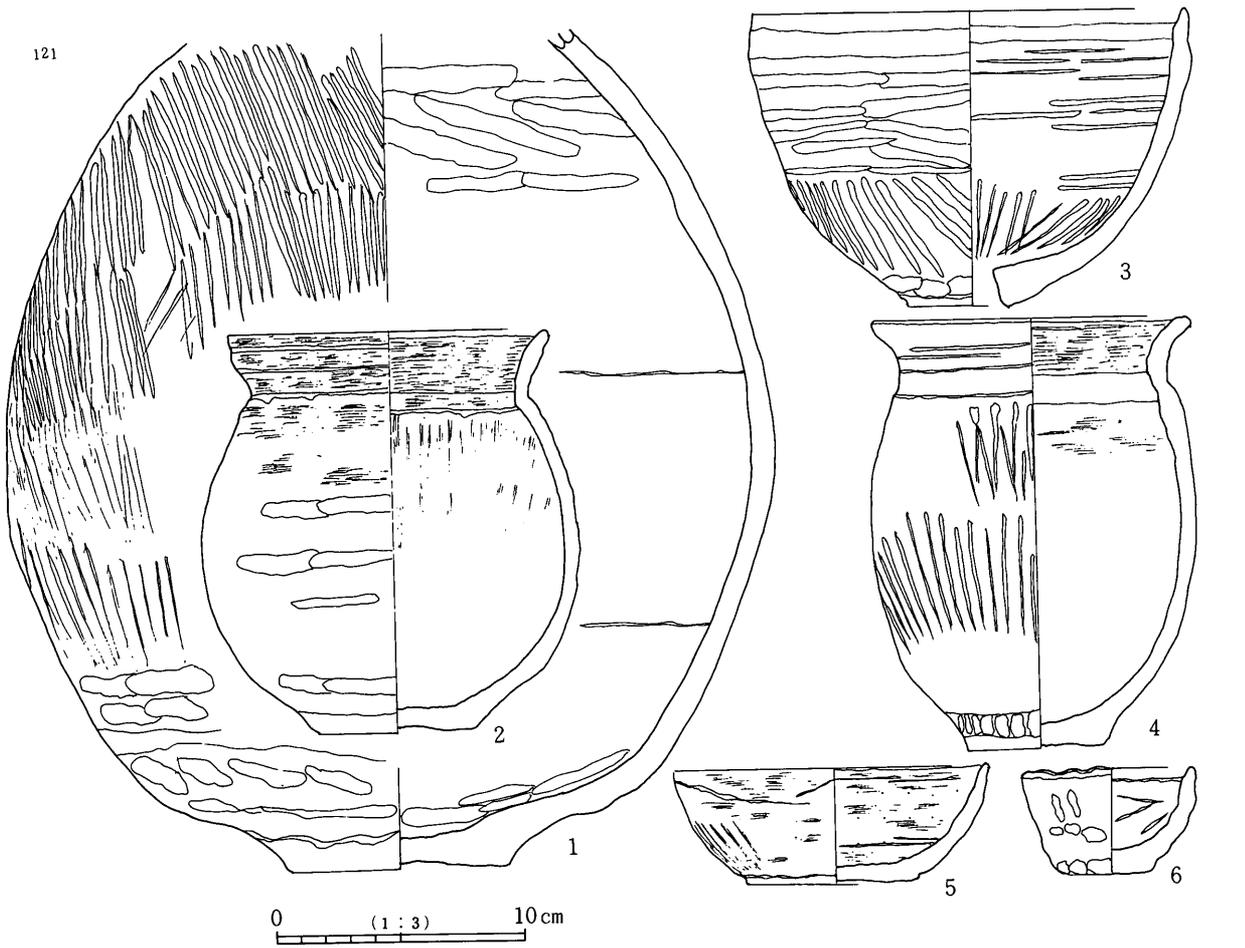
第138图 110·130号住居址出土土器



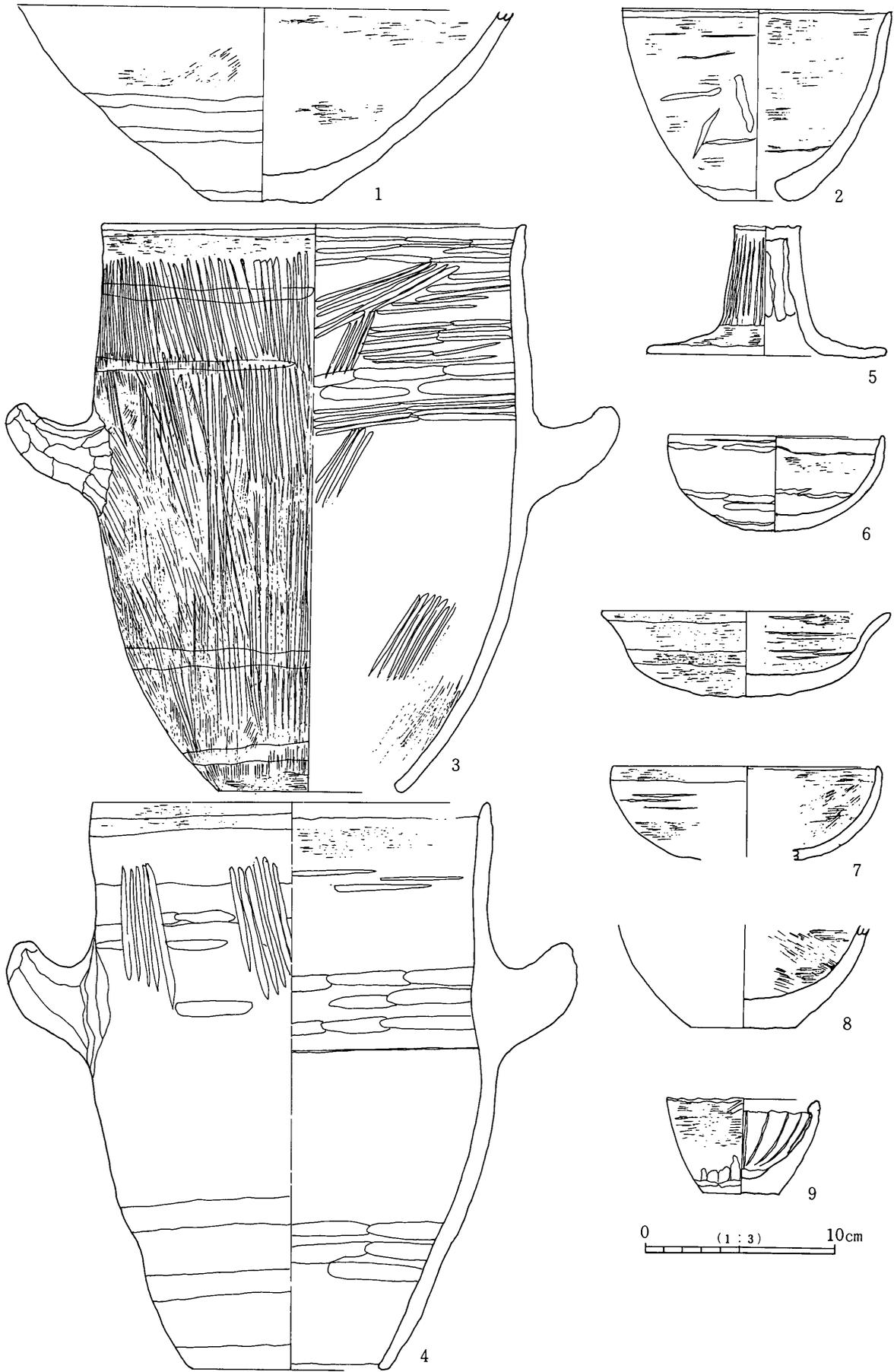
第139图 130号住居址出土砾手石



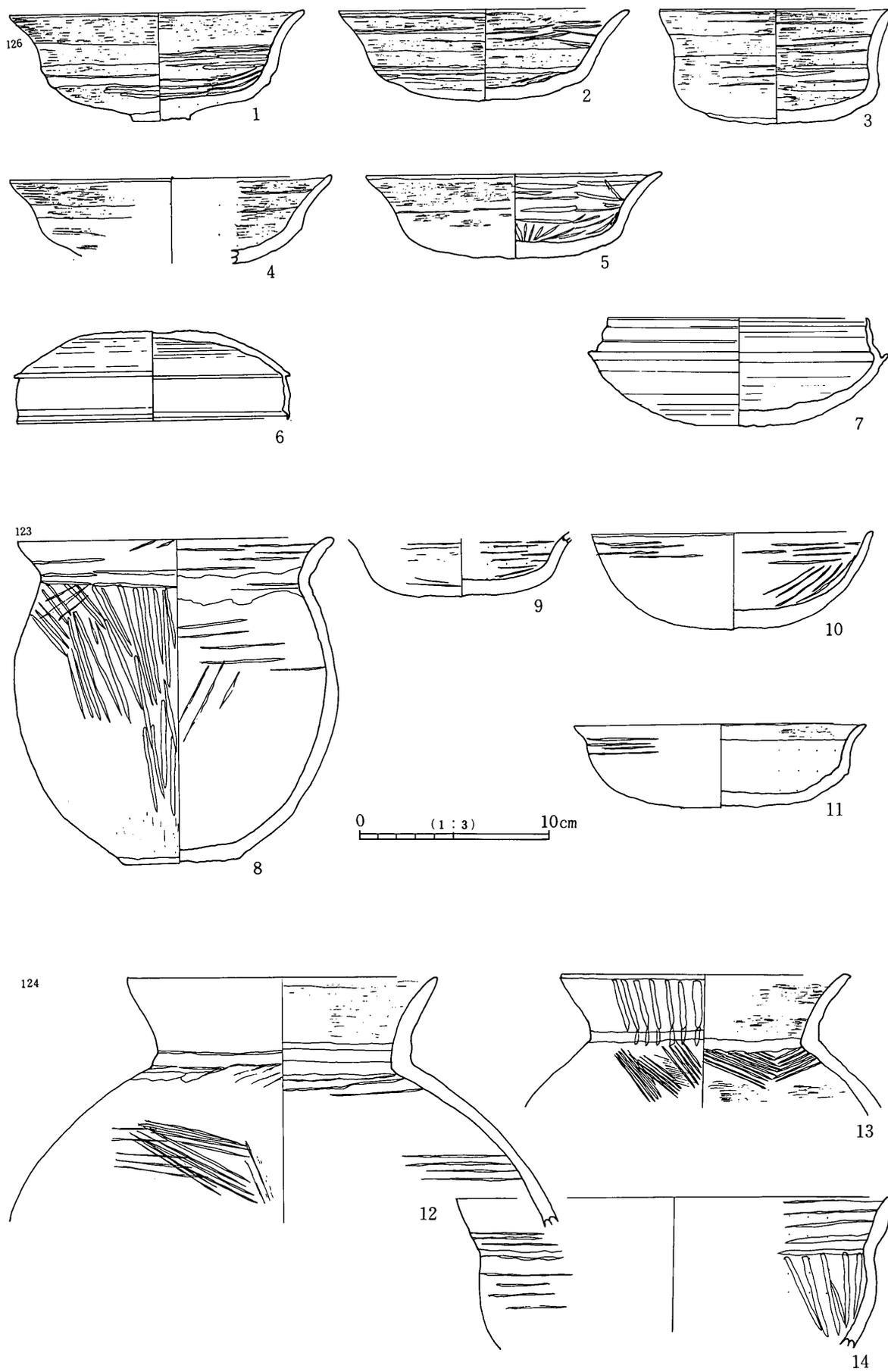
第140图 117·9号住居址出土土器



第141图 121·122号住居址出土土器(1)



第142图 1 2 2号住居址出土土器(2)



第143图 126·123·124号住居址出土土器

片が出土する竪穴群が検出された。竪穴群の検出に追われている内に、黒色土のピットの検出がおろそかになった。その結果、記録に残されたピット群は、7図の建物址16・17・18・19である。このほかにも、方形のグループがあると思われる。これらの竪穴群の北側でも縄文時代前期の土器片が出たり、黒色土のピットも多く出るので、何回か掘り下げる内に、土師器片が複数で深いピットが検出されたので、詳細調査を試みたところ、深さ30cm以上のピットが検出されたので、その配列を探していたがなかなか見つかりにくかった。ここから北側のX・Y辺りには、黄褐色土や黒色土の覆土を持つ大きめな掘り込みが、重複していることが分かり、個々の掘り込みを検出している内に、深さ60～70cmに及ぶものが連続していて、中には板築状に堆積する覆土を持つもの・柱痕状の縦の掘り込みがあるもの等が確認され、大規模な建物址の所在が確認されたり、副産物として穴の底に住居址の床面が見つかって、119号住居址の調査が行われた経過がある。建物址1の北側のピットも確認されて、規模の大きい建物址と確認されたのは、119号住居址の検出の結果でもあった。生憎建物址1の中央部分には、畑灌水の給水施設があるために掘り広げることができないので、中央に未調査部分を残して配列を確かめる調査が行われている。幸い両側に同系列のピット1・2・7・8・10・20・39の7個が検出され、柱穴5個と3個以上の方形配列が確認され、梁行5.5m・柱間4間の建物で、桁行は3間以上の建物である。柱穴の配列から棟方向はN43°Wで、近くの住居址ではD1地区の81号住居址、D2地区の117号住居址等と同方向の建物であることが分かった。117号住居址までは、ほぼ10m、西南の81号住居址までは10mほど離れた位置にある。

② 掘立柱建物址 2 (図125・127、写図57)

建物址1の北側、1mほど離れた位置に、建物址1と同方向に並ぶ建物址で、9個の大きなピットが検出されている。この建物址は大部分119号住居址と重複し、後述の建物址4とも一部重複している。検出を始めた頃は、この周辺には大形で覆土が黒色土であったり、黄土のブロック状の覆土が含まれるピット群の存在が予想されて、大形掘立柱建物址の検出に色めき立った。個々のピットの半割土層調査を慎重に進めたところである。その結果、P16の検出中に50cmほど下から焼土が発見され、真っ赤に焼けた床面が検出された。別の住居址の発見で、119号住居址の地床炉であった。このP16を南の隅柱にした、柱間、4間と3間以上の大形掘立柱建物址である。このピット群の確認によって、黒色土の覆土の建物址1・黄褐色土混じりの覆土を持つ、さらに大形な掘立柱建物址4が、重複して発見されている。

建物址2は主軸方向は、建物址1と同方向のN43°Wで、梁行(P16～P12)は5本柱で4.5m、桁行(P16～P40)は3本以上である。個々の柱穴も長径30cm・短径25cmあって、建物址1よりも掘り方は大きく、深さも49・55・60・70・52・67・51cmと深いものが多く、P17・16・15・14・13・18には穴底に小ピットが掘られている。覆土にも特徴的なものが多く、板築状の土層堆積がみられ、P14には、柱痕が60cmほど下層まで続き、中層には踏み固められたような、幾層ものタタキ状の層が重なっている。住居址との関係を見ると、主軸方向の同じものは、近くの住居址では117・9号住居址である。

③ 掘立柱建物址 3 (図125・127、写図58・62)

建物址2の5mほど北側に、柱穴4個が直列に並ぶ建物址3がある。大部分が西側用地外のかかるので、梁行か桁行か不詳であるが棟方向はN54°Wで、建物址1・2や後述の建物址4とも10°ほど違っている。個々の掘り方をみると、P4は畑灌水調整器の施設で壊されているのではっきりしないが、P3・5・6の掘り方は径50cm・深さも70・80・60cmあり、土層状況も柱痕の残る規模の大きな柱穴で、規模の大きな掘立柱建物址と思われる。

④ 掘立柱建物址 4 (図125・127、写図5・57・61)

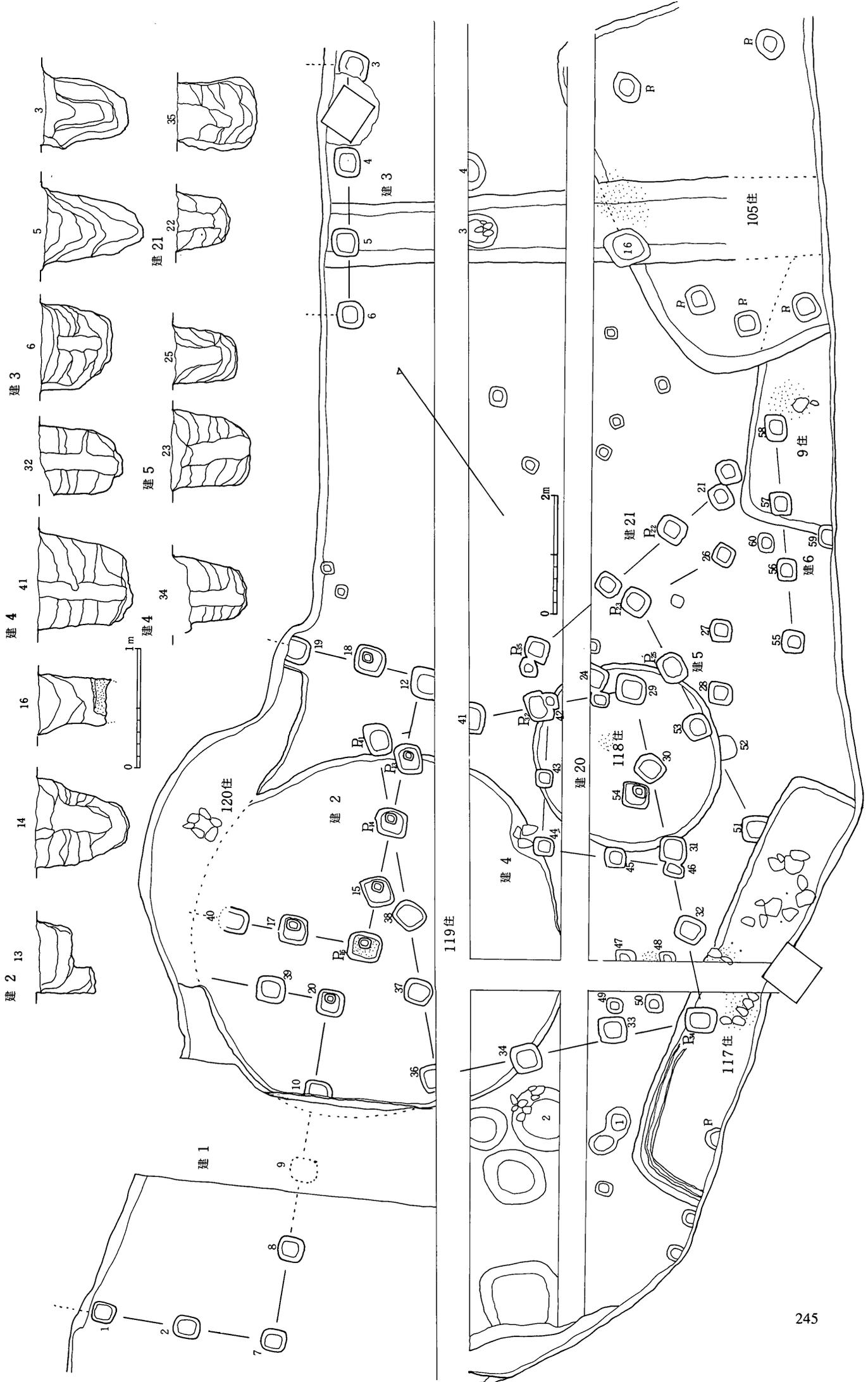
建物址4はD1・2地区の境辺り、建物址2に北側コーナーの2個が重複する位置にあり、南北方向5個、東西方向4個の方形配列の柱穴が14個検出されている。梁行5.7m・桁行4.6mで、大形な建物構造の全容を知ることができる、唯一の掘立柱建物址で、規模も一番大きい。主軸方向はN64°Wで、建物址1・2とはやく20°西に触れる建物である。同方向の住居址は、近くでは108・105号住居址である。柱穴の大きさは建物址2とほぼ同じくらいの、径50cmほどの方形であるが、深さは建物址3とほぼ同じかそれ以上のものが多い。梁行方向の西側・東側のものは、西側は70・67・68・70・76cm、東側は72・70・55・56・71cmで、桁行の中側2個づつは60・56・70・60cmで、この周辺の建物址の中では深いものが多い。建物址4の範囲の中には、建物址20のピット、118号住居址のピット、117号住居址の煙道周辺のピットが重複し、さらに水道本管の溝・畑灌水本管の溝等による破壊が多かったので、検出し切れないところもあったが、規模の大きい建物址がかるうじて検出されている。個々の柱穴の中で覆土に特徴があるものは、柱痕を残すものはP41・32・34であり、ピットの上面に円形状の硬い面が検出されたのはP29であった。位置的に重要なものは、117号住居址の竈を切って掘り込まれたP34で、125図にあるように、住居址の検出によって下げられた面から65cmの深さがあつたから、実際の深さは80cm以上に及ぶかもしれない。この結果、117号住居址を切っていることから、117号住居址・建物址2より新しい時期のものといえる。生憎というか、幸いというか、住居址・土坑・ピットが重複しているために、好い結果が出たとも思われる。

⑤ 掘立柱建物址 5 (図125・127)

建物址4の東側に径40～50cm・深さ60～70cmほどの、方形の柱穴が5個並んでいる。棟方向はN82°Wでこれの合う方向のものはこの近くではみ当たらない。この周辺には似たような大きな穴が数個以上検出されたが、耕作の攪乱も進んでいたため、見極めることが困難であったが、別の建物址があるかもしれない。

⑥ 掘立柱建物址 6 (図125)

建物址5の東側に9号住居址に重複する、径45～50cm・深さ60～70cmの大きな穴が4個並んでいる。棟方向はN59°Wで建物址3・4に似ている。ここから東側105号住居址と重複する、同様の



第125图 建物址1·2·3·4·5·6·20·21

大きな柱穴状の穴がある。さらに西側には建物址21と登録した4個直列の建物址がある。この周辺の建物址5・6・21はもう少し綿密な検出をすれば、別の配列が見つかるかもしれない。

⑦ 掘立柱建物址 20 (図125)

建物址4の東側隅に近いところに径30cmほどの小振り穴が6個、3×3の方形配列がある。梁行2.4m・桁行2.2m、棟方向はN46°Wで建物址1・2と同方向である。この場所は118号住居址の中に大部分重複するのではっきりしないが、穴の深さは40～50cmあるので建物址として登録したものである。

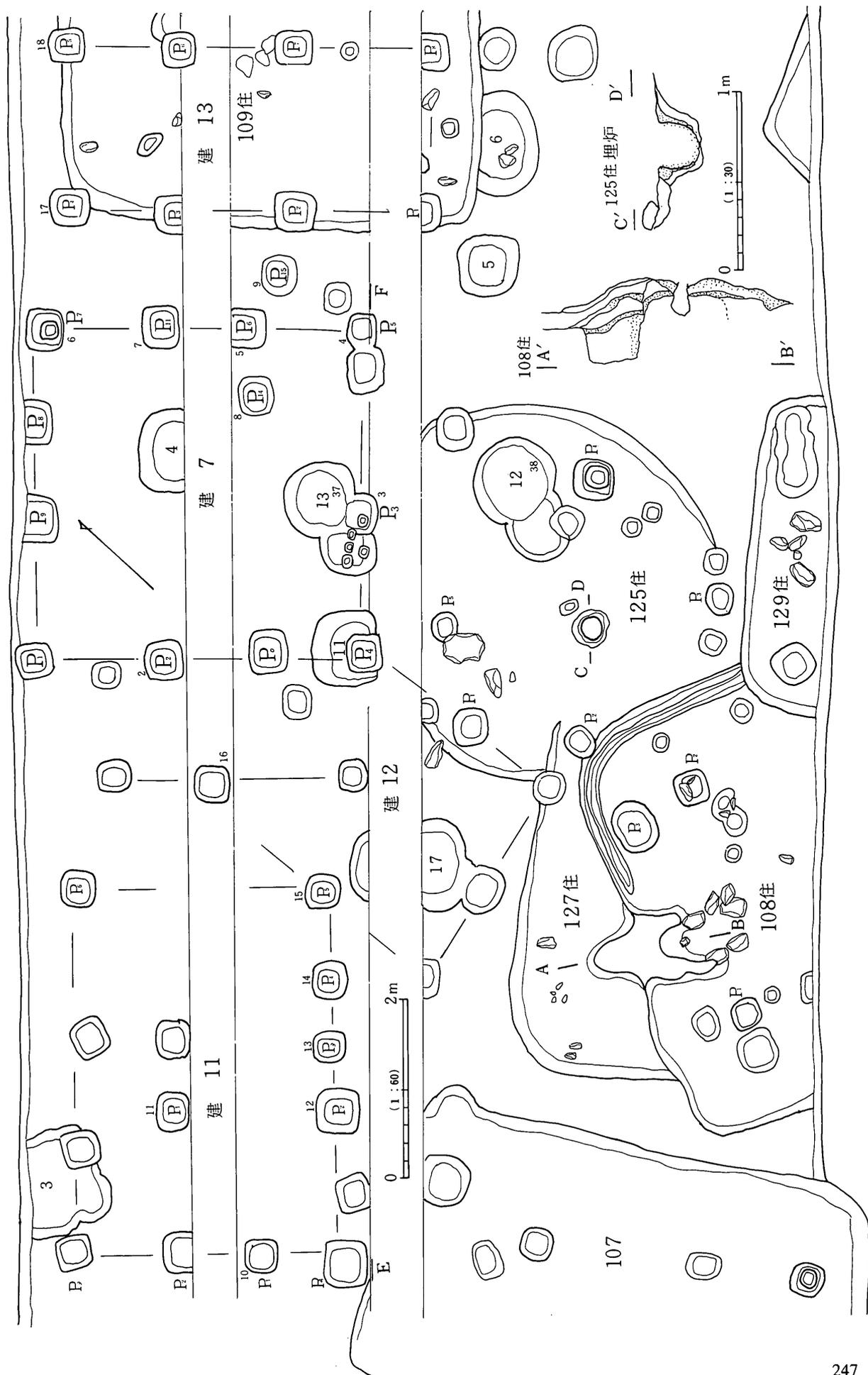
D1地区からD2地区にかける20mほどの範囲に、建物址1・2・3・4・5・6・20・21の8棟が登録されている。この他に構成グループから外れる穴もあるので、この数は増えるかもしれない。この建物址の集合する範囲、建物址1からやく7m西側の81号住居址から、建物址3の東側の105号住居址までの25mほどの範囲には、古墳時代の住居址は81・117・9・105号住居址の4軒だけで、しかも、117・9・105号住居址は東側用地外へかかる位置にある。したがって、西北側は住居址の発見のないところに、建物址群が検出されていることになる。このことは、次ぎに報告する建物址7・11・12・13も似たような位置に検出されている。限られた10mほどの範囲に重複しながら構築されている。西側の状況は不詳であるが、昭和52年の記録によれば、この辺の西側は古墳時代の住居址が少ないので、建物址の存在が予想される。

⑧ 掘立柱建物址 7 (図126・127、写図59・60)

D2地区中央付近M・O列西側に、長軸方向4本、短軸方向4本の方形配列のピット群がある。柱の配列は規則的で、梁行3.6m・桁行3.7mのほぼ正方形の建物址で、棟方向はN42°Wである。柱穴の大きさは径は最大50cm、最小35cmほどで、深さはP1からそれぞれ、40・43・50・60・58・43・40・38・40・38・36cmほどで、先の建物址3・4と比べると柱穴の規模は小さい。深めなP3・4は、建物址11・13と重複しているが、断面調査図による127図のように、柱痕の形跡が検出されている柱穴群が検出されるまでは何回か掘り下げた一帯であるから、実際の深さはさらに、10～20cmくらいは深いと思われる。この辺りも畑灌水本管の溝と、水道管の溝により破壊が進み検出が困難ではあったが、ほぼ全容が確めることができた建物址である。

⑨ 掘立柱建物址 11 (図126・127)

D2地区中央付近、107号住居址の北側コーナーや建物址群と重複しながら、不規則ではあるが長軸4～6個、短軸4個の方形配列の建物址が検出されている。梁行4.2m・桁行3.0m、棟方向はN42°Wで、北側の建物址7・12・13や南側の建物址1・2・3とほぼ同方向である。柱穴の大きさはまちまちであるが、径の大きいものは50cm、小さいものは35cmほどで、深さも西側角P3から38・27・26・40・36・38・37・34・41・36・31cmで、ほぼ平均した深さである。建物址7と同様に、水道本管の溝・畑灌水本管の溝等で破壊が進み、堅穴・土坑等の重複があるので掘り下げが何回か行わ



第126图 建物址7·11·12·13、108·125·127·129号住居址

れた後の検出であったから、実際の深さは10～20cmほど増すかもしれない。

項目を立てないが北側に並行する3個の直列配列・棟方向N5°Eの方形配列の建物址12がある。

⑩ 掘立柱建物址 13 (図126・127)

D2地区、建物址7の北側に並び、109号住居址と重複する建物址で、4個ずつ並行するピット列が検出されている。4個の長さは4m・P1とP8の間隔は1.8mあって、穴の形態・配列は整った建物址である。穴の長径は50cm短径40cmほどの長方形で、深さも109号住居址の壁上から測ると西隅のP4から46・48・40・48・48・56・56・40cmと安定した状態である。棟方向を南東から北東方向にみるとN42°Wで建物址7・11と同方向である。4個2列の並びはほかには似通ったものがないので、この建物址の在り方に課題が残される。

この建物址11・12・7・13の周辺も、古墳時代の住居址は107・108・129・113号住居址が並ぶが、東側に片寄る位置にあり、建物址が集合し易い位置にある。但し、今回の調査によっては西側に古墳時代の住居址は検出されていないが、昭和52年の畑灌水パイプ敷設工事に伴う立入り調査の結果では、用地境に近い辺りから西北側にかけては、古墳時代の住居址の集合が報告されているので、住居址と建物址の位置関係を確かめる課題を残す地域の一つとなる。

⑪ 掘立柱建物址 8・9 (図6)

D3地区南側121号住居址の北側で、西側の用地境沿いに、5個のピットが直列に並ぶところがある。大部分は西側用地外へかかると思われるが、場合によると東側にかかわるものがあるようにも思われる。5個の長さは6mあって、棟方向はN50°Wと思われ、南側の建物址7・13や121号住居址とほぼ同方向である。穴の径は40cmほどと大きめであるが、深さは30cmほどであった。

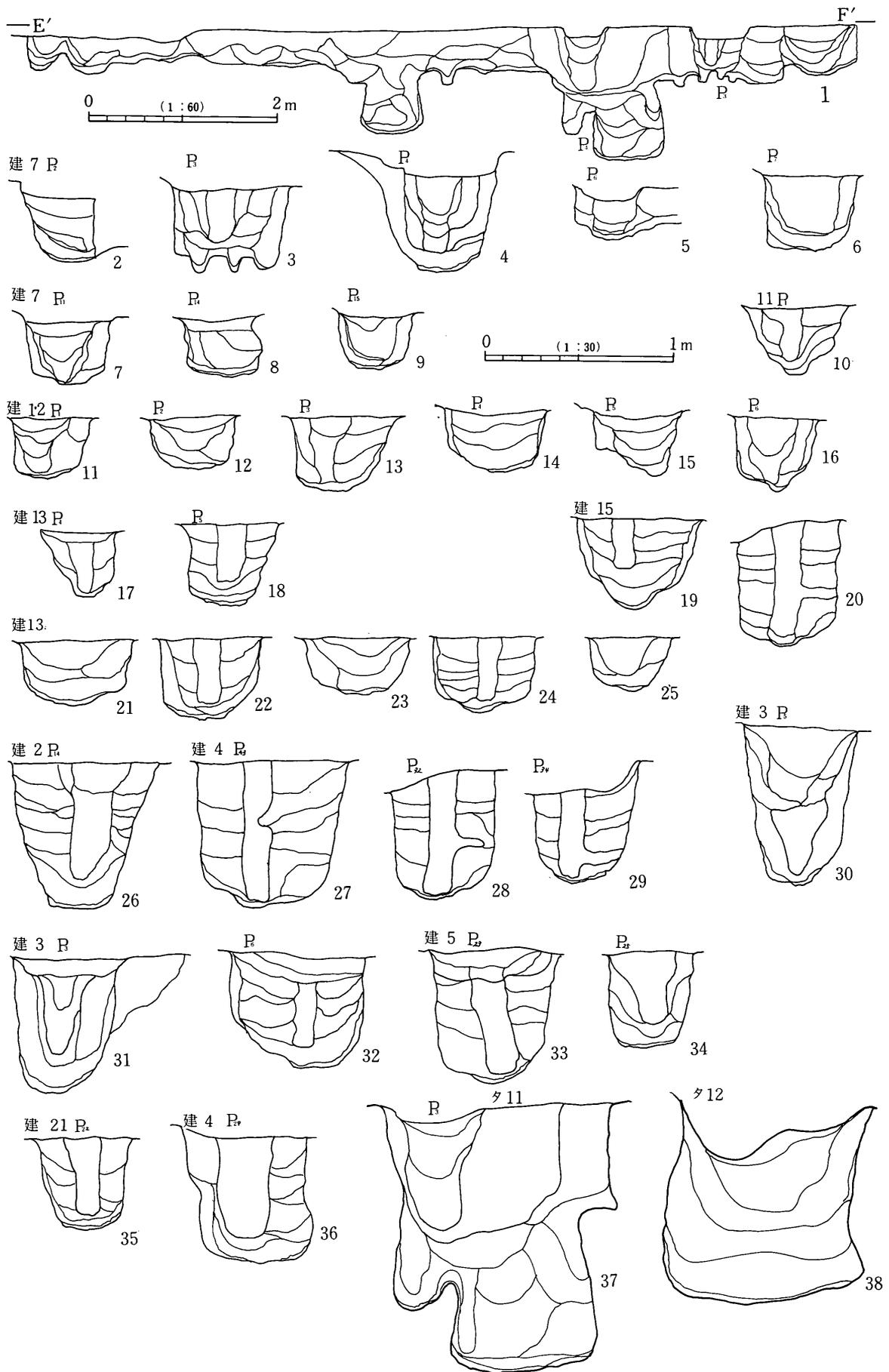
建物址9は建物址8の東南方向で、東側用地境沿いに3～4個の直列または並行するように8個のピットが検出されている。116号住居址と重複していて、揃った位置ではないので柱の構成が掴みにくいが、建物址9と登録してある。

⑫ 掘立柱建物址 15 (図6・122、写図62)

110号住居址を検出中に、径50cm、深さ75cmほどの深い穴が検出され、板築状の覆土・柱痕状の覆土が確認されたので、建物址15と登録された。このような穴は西隣でも検出され、北側に4個のピットと1個のピットがL字形に続くものがある。棟方向はN5°Eで、建物址12に類似している。そのL字構成の南角のピットに続いて、東南へ向かって並ぶピットが3個検出されている。この4個は110(130)号住居址に付随するピットかもしれないが、この辺りにも建物址があると思われる。

⑬ 建物址 10・14 (図6)

D3地区の北側で、123号住居址の西側用地境に、やや方向を違えて並ぶ建物址10・14である。建



第127図 建物址ピット土層図

建物址10は3個直列に並ぶもので、大部分が西側用地外（フルーツパーク駐車場）にかかるか、場合によると、122号住居址の西側に固まるピット群につながるものかもしれない。西側壁沿いの並びで見ると、棟方向はN48° Wで、建物址8や121・123号住居址と同方向と思われる。

建物址14は建物址10の北側にあつて、123号住居址の竈煙道に重複し、132号住居に重なっている。東側の3個の並びに続くものと、他の大部分が西側用地外のフルーツパークの駐車場にかかると思われる。3個の並びから棟方向を推定すると、N55° Wと思われる。穴の径はやく40cmほどで、深さはそれぞれ45・43・46cmで比較的深い穴であった。

D3地区の建物址15・8・9・10・14は、建物址15を除いて棟方向がN50° W余りで、周囲の121・116・124・123号住居址に類似している。この4基の住居址の間には12×6mほどの空間があり、昭和52年の立入り調査・平成7年の発掘調査の結果でも、古墳時代の住居址は少ないところであるから、その空間を利用した大小の建物址があるのかもしれない。3×3程度の建物址の所在を肯定すれば、建物址9は121号住居址、建物址10は124号住居址または123号住居址に付随する建物址かとも思われる。

（8）古墳時代の住居址・掘立柱建物址の広がり

① 住居址の広がりと時期

今回の調査区B・C・D・E・F地区の中で、古墳時代の住居址が検出されたところは、C～E地区で、それぞれの地区で検出された住居址数は、C地区ではやく60mの範囲で10軒、D地区ではやく100mの範囲で22軒と、E地区南で1軒の合計33軒である。調査面積で概算すれば、C地区の方が密度が高い。掘立柱建物址の検出は殆どがD地区であったから、集落密度からすれば大差ないことになる。はっきりしていることは、E地区では最南端に1軒だけであるから、集落はC・D地区に構成されていることになる。このことは昭和52年の畑灌水パイプ敷設工事に伴う立入り調査の結果とも合うことで、立入り調査の記録によると、伊久間原地籍では農道入道洞線周辺から南側一帯にかけて記録された古墳時代の住居址は、古墳時代中期の住居址11軒、同後期の住居址68軒とあるから、地域全体の広がり今回の調査地と同様に思われる。時期比定の基準が、調査方法の相違・担当者の違いによって、判断が同一ではないので一概にいえませんが、今回の調査結果も大差ない結果と思っている。いずれにしても、機会ある度に深める条件は揃ってきたと思われる。とくに、後期の住居址は全面的に広がるが、中でも、今回のC地区の西側、D2・D3地区の東側に、集中する傾向がある。今回は、それぞれの一面を検出したことになる。

古墳時代の土器から時代を決める手立てとして、土器形式があり、その土器形式を土師器の場合、五領式土器・和泉式土器・鬼高式・真間式土器・国分式土器と分け、五領式土器が古墳時代前期、和泉式土器が中期、鬼高式土器が後期とされ、真間式土器は奈良時代、国分式土器は平安時代に位置付けられている。今回の調査では、前期の五領式土器と、奈良時代の真間式土器は発見されていない。古墳時代中期の和泉式土器に位置付けられるものは、C地区90号住居址のものだけと思っている。他の住居址は全部、古墳時代後期の鬼高式土器が伴うものと扱っている。但し、同じ鬼高式であっても古期と新期のものがあるので、実際には不詳なものも多いが、可能なものはⅡ・Ⅲ期に分けてみてい

る。Ⅱ期（古期）と思われる住居址を西南側のC地区から揚げると、C地区では88・86・85号住居址の3軒、D地区では82・117・9・108・130・121・122・123号住居址の8軒で、E地区の68号住居址を含めて9軒である。Ⅲ期（新时期）のものはC地区では92・93の2軒、D地区では105・107・110・126号住居址の4軒かと思われる。

竪穴の大きさもいろいろあって大中小の分類基準を、一辺7m以上を大、5.5m～6m代を中、5m以下を小としてみた。大は88・81・117・107・68号住居址の5軒で、地域的には散在している。中は92・93・82・105・121号住居址の4軒、小は90・86・85・108・129・130・124・122・123号住居址の9軒で各地域にあるが、総体的にはD地区の北側に多い。遺物出土の多い住居址は、小さな住居址に多い傾向がある。過去の調査によると、13号住居址に多い例もあるから今後の調査結果を待ちたい。一辺8m以上の大形な住居址は81・110号住居址だけで、以前に調査された13号住居址を含めても3軒だけである。他地域の例では、塩尻市平出遺跡で11m、飯田市市原遺跡で13m、阿智村京田遺跡で13mの特大住居址が検出されているから、伊久間原遺跡でもやがて検出される公算は大きいと思われる。

今回の配列だけでははっきりしたことはいえないが、大小の竪穴が組み合わされて、世帯を構成することもあり得ると思っている。長方形の竪穴の場合に、長径の方向を主軸方向とする住居址が多い。主なものは、90・86・93・107・121・123・13号住居址である。この傾向を判断する材料はまだ少ない段階であるが、伊久間原の場合は多いように思われる。主軸方向についても、N50°W前後のものが多いのも特徴の一つと思われる。主軸方向が確認できた住居址が23軒ある中で、50°前後のものは18軒ある。この中には新旧のものが混じっているから、伊久間原の場合は時期が接近しているか、地形的な条件があるかもしれない。

掘立柱建物址が、21棟検出されたことも特徴の一つで、2～3時期にわたるものが検出されている。大小さまざまなものがあるが、柱間が4×3の大形なものが検出され、大きな柱穴・板築状の覆土が多く検出されている。最も成果と考えられることは、住居址と掘立柱建物址の位置関係で、住居址の近くに計画的に掘立柱建物址が建てられている。住居址との切り合い関係、棟方向と住居址の主軸方向との関係、掘立柱建物址同志の切り合い関係等、今後に課せられた課題は大きい。集中的に検出された地域はD地区であるが、今回の調査地では、用地の東側に住居址が集中し、西側に掘立柱建物址が集中する傾向がある。昭和52年の立入り調査の記録によれば、D地区の東西両隣接地域をみると、住居址の集合は東側に多いように思われるが、西側も決して少なくないので、面的な調査が行われれば、これらの位置関係がはっきりするものと思われる。

古墳時代にかかわる課題は、集落構成のことは勿論であるが、集団墓地があるに違いないので、その場所を検証することである。E地区で1基だけ古墳時代の土坑が検出されているが、墓坑であるかどうかは不詳である。北側一帯には住居址の存在は極めて少ないことは、昭和52年の立入り調査・平成9年の発掘調査の結果で判断できるが、土坑の存在の可能性は高いと思われるので、これも課題の一つである。もう一つの課題は生産地域の問題で、同時期の住居址の数はどのくらいか、集落構成はどうなっているか、水田耕作が行われているか、行われていればその場所はどこか、古墳時代だけでも課題が多く残された調査であったと思われる。

(9) 平安時代の遺構

旧来から、伊久間原では平安時代の遺構は勿論、灰釉陶器片等も殆ど確認することがなかった。昭和52年の畑灌水立入り調査の記録によると、平安時代の住居址が4軒確認されている。今回の調査区E・F地区の西側で3軒、D1地区の南側で1軒、さらに南側で1軒確認されているが、報告書によると確実なものは2軒とも言われていた。平成9年のG地区からJ地区間での試掘調査でも、灰釉陶器片2片が収集されただけで、平安時代の遺物はごく希少であった。

今回の発掘調査では、E地区の西側で、灰釉陶器・土師器片を伴う土坑が4基以上、F地区C3の中央部で灰釉陶器・土師器片を伴う工房址的な落ち込みと掘立柱建物址1棟、F地区北Q5辺りの西側から灰釉陶器を伴う竪穴式住居址の一部は検出されている。

① 44号住居址 (図144・145)

F地区Q5辺りの西側用地境に1mほど現われ、大部分が西側用地外へかかる隅丸方形の竪穴式住居址で、径5m・深さ40cmほどの竪穴で、上層に長さ30cmほどの焼石が2個あり、焼土や炭が30cmほど堆積していた。その中から灰釉陶器碗形土器が2個・坏形土器が4個壊れて出土し、土師器甕形土器片が出土している。床面らしいところははっきりしないで、軟弱で凹凸の多い床であった。ピット等の遺構は検出されていない。

145図2は、口径14.2cm・器高6.3cm・高台径7.5cm・高台高さ1cmの碗形灰釉陶器で、口縁がやや外反する。青灰色の釉薬がかかり、付け高台・糸切り底である。3は、口径14.5cm・器高6.8cm・高台径7.5cmの付け高台で、高台の高さは1.3cmある。口縁は直立気味で、内側に細い二重沈線がつく。釉薬は灰白色で、濁りがある。糸切り底である。4は、口径14.3cm・器高6.3cm・高台径7cm、高台高さ1cmで、口縁は立ち上がり気味であるが、僅かに外反し内側に沈線刻みがある。釉は灰白色で濁りがある。糸切り底である。5は口径・器高不詳、高台径7.8cm・高台高さ1.3cmで、外反気味の碗形灰釉陶器である。7～9は碗形・坏形灰釉陶器の口縁部、10は口径11.3cm・器高3.5cm・高台径5.8cm・高台高さ7mmの坏形灰釉陶器で、高台は細く外反して、口縁は内湾しながら立ち上がる。糸切り底である。11は口縁10.4cm・器高やく2.6cm・高台高さ7mmで張り出しが小さい。この他にタタキ目のつく土師器甕形土器片・鉄片が出土している。

② 71号住居址 (図144・145)

F地区C3辺りに38・53・72号住居址、竪穴群と重複する黒色土の覆土を持つピット列と、黒色土の堆積する竪穴があった。生憎水道管の溝で切られているが、反面土層の確認は可能であった。竪穴は長径やく3m・短径2.8mの隅丸楕円状の竪穴で、深さ30cmほどの碗状の落ち込みで、3か所に2～5個の集石があり、量は少ないが炭混じりの覆土で、東側の集石付近に焼土がある。その焼土の中から坏形灰釉陶器と土師器片が出土している。この竪穴・北側のピット群を含めて確認された遺物はこの2点だけである。竪穴の中と内縁に、4個のピットが検出されている。規則性はないが、覆土からみて関連するものと思われる。住居址と登録してあるが、工房址的な竪穴と思われる。145図14は、

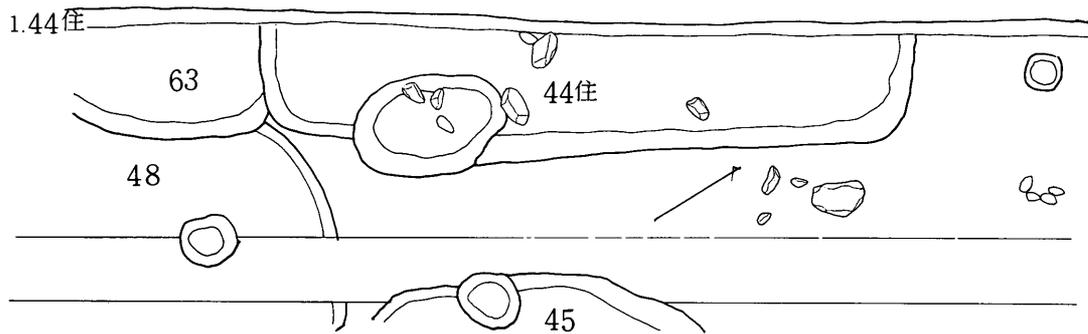
坏形灰釉陶器で口径12cm・器高2.5cm・高台径6cm・高台高さ6mmで、口縁は直線的に外反する器形で、内側底部近くに段が張り出す段皿である。釉は灰白色で、糸切り底である。

竪穴の北東縁に接しながら、長軸4個以上・短軸4個の方形配列のピット群がある。P1～P7・P9に続く、4×4と思われる掘立柱建物址22である。P1～4まで4m、P4～7まで4.5mの方形配列で、東南側は確認されていない。この柱穴は長径25cmほど、深さは35～51cmほどある整ったものである。この方形配列の中に、同方向の小振りな方形配列があり、さらに南西方向へ続くP13・8・14・15の直列のピット列がある。この建物址の時期は確かめる材料に欠けるが、覆土・周囲の状況から平安時代の掘立柱建物址と考えられる。

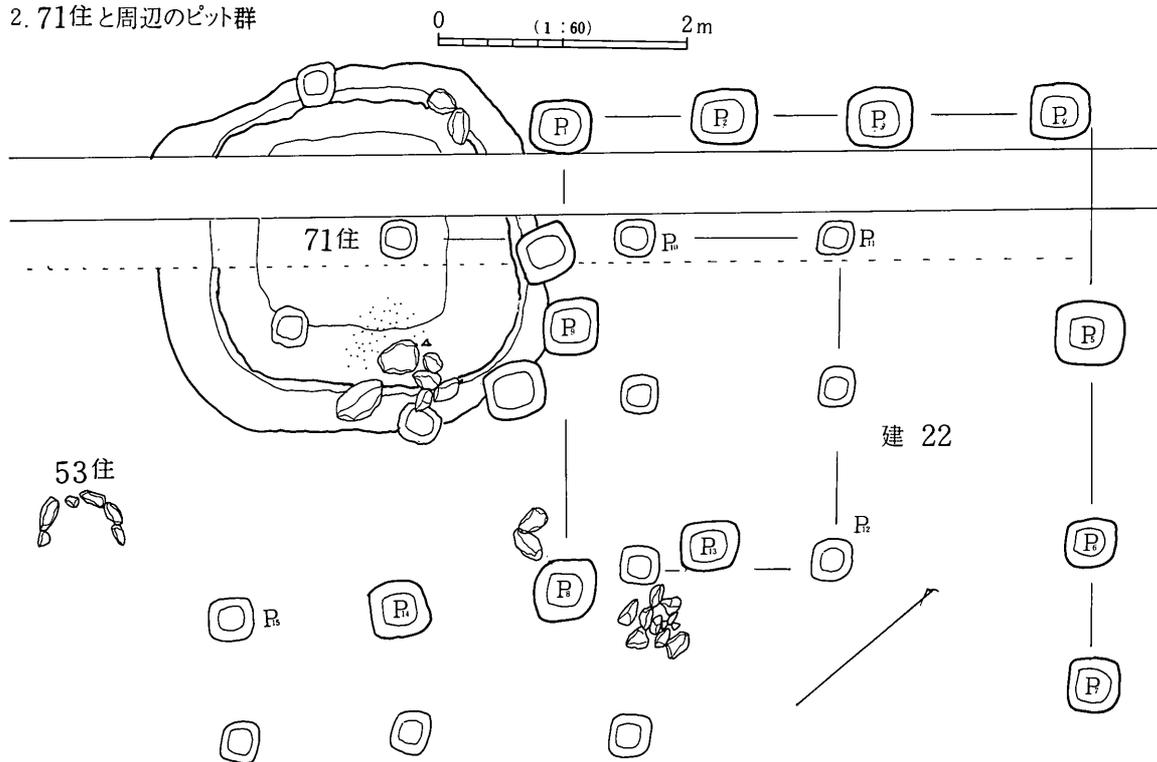
③ 平安時代の土坑群 (図144・145)

E地区の南、E～G列西側の用地境にかけて土坑29・30・31・32とピット群が検出されている。畑灌水パイプ本管の溝で切られているところでも、焼土塊が確認された。後の土坑30・32である。土坑29は一部西側用地外にかかるが、長径やく1.1m・短径95cm、深さ65cmの二重構造の土坑で、中層と下層に焼土が厚く堆積し、下層に近いところに2個の石があり、灰釉陶器・土師器片が出土している。145図12は、口径11cm・器高2.1cm・高台径6cm、高台高さ4mmの、坏形灰釉陶器の完形で、やや厚手の皿で、糸切り底である。釉は灰白色で高台まで垂下がっている。この坏のほかに坏形土器片・土師器甕形土器片が数点出土している。土坑31は、土坑29の西南3mほど離れたところにある。径80cm・深さ50cmほどの土坑で、炭と焼土混じりの覆土で、上層から坏形灰釉陶器と土師器片が出土している。145図13は土坑31からの出土で、口径10.8cm・器高2.2cm・高台径6.2cmの皿である。口縁は直線的であるが、外反ぎみに開いている。糸切り底で全の墨書がある。釉は灰白色で外はごく薄く内部は底近くまで垂れ下がっている。土坑30・32は、径90～1m・深さ45～50cmほどの土坑で、とくに土坑32は焼土を含む覆土であった。双方とも遺物は発見されていない。これらの周辺には大小7個のピットがあるが、細かい検出をしないまま調査を終了している。畑灌水の本管溝縁に焼土があったから、この他にも炭・焼土を含む土坑があったかもしれない。何れにしても、平安時代と思われる土坑群・ピット群である。

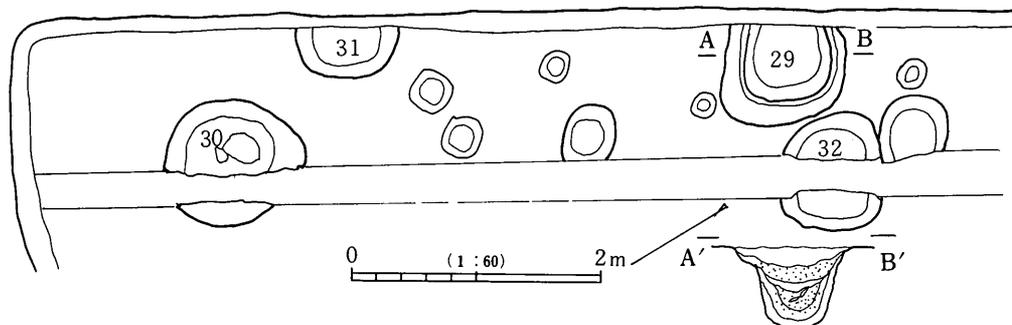
先にも触れたように平安時代の遺構・遺物の発見が少なかった伊久間原遺跡では、これらの住居址・工房址・土坑群の検出は大きな成果の一つである。しかも、検出された場所がE・Fに限られていたことも重要な結果と思われる。昭和52年の立入り調査によっても、調査地Dの南側で、平安時代土師器を伴う遺構の発見が記録され、調査地Fの西側一帯で、複数の住居址の発見が報告されている。今回の44号住居址・71号住居址(工房址)・土坑群は、みなE・F地区の西側であるから、この西側一帯に平安時代の集落の存在が実証されたことになる。立入調査の記録によれば、このE・F地区の西側一帯には、縄文時代中期の住居址が7軒のほかは、弥生時代後期・平安時代の住居址が散発的に記録されている。北側の城ノ上地籍には中世の遺構があったり、中世陶器片が拾えるところがあるので、平安時代・中世の遺構発見があるかもしれない。この時期のものは、表面で拾えることが多いので、詳細分布調査が必要と思われる。



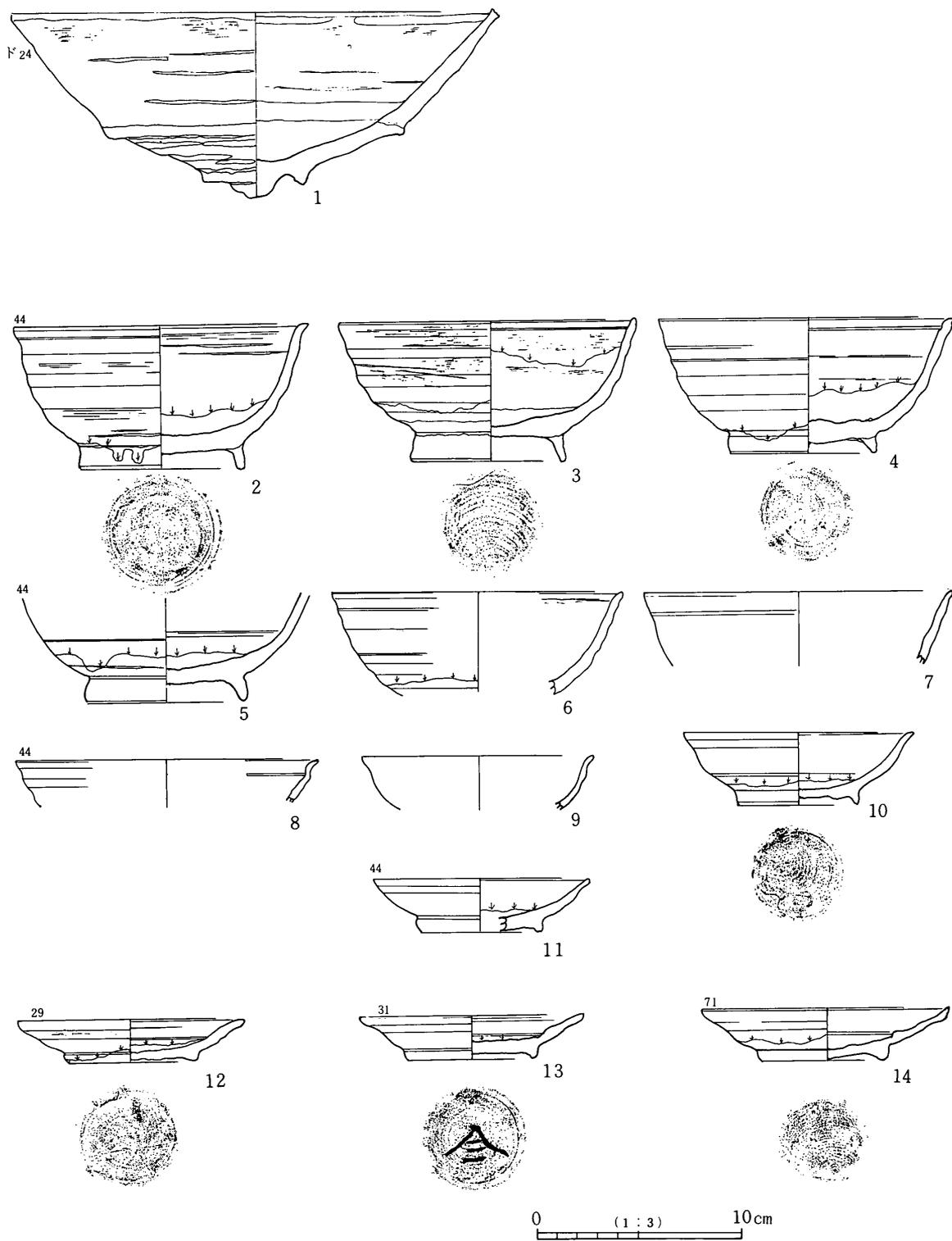
2. 71住と周辺のピット群



3. E地区南土坑群



第144図 44・71号住居址と土坑群



第145图 44·71号住居址·土坑群出土土器

(10) 中世・近世以降の遺構

伊久間原には台地の先端部に「伊久間城跡」があることは知られているが、城跡遺構の確認調査や遺物収拾の調査は殆ど行われていなかった。昭和52年の立入り調査でも、大形な溝址の発見は記録されているが、遺物の出土についての記録は余りない。

今回の調査でも、さほど多くはないが、青磁の小片・天目茶碗片・古瀬戸系の陶器片は断片的に出土している。比較的多かったのは北側のH地区と中央部のE地区であった。先の平安時代の遺構発見例のように、中世の遺構・遺物発見の可能性が高いところでもある。

① 石積遺構と工房址 (図6・48)

E地区南、64号住居址の中と南外側に、上面に拳大の集石を持つ焼土の固まりが2か所(集石1・2)、集石はないが焼土の固まりが2か所(石3・4)検出されている。集石1は長径の1.1m・短径80cmほどの固まりで、上面に30個ほどの石が広がっている。集石2は64号住居址の中にあり、長径90cm・短径40cmほどの範囲に、人頭大の石1個と拳大の石が10個ほど集められている。石3は集石2の西側にある、長径1.1m・短径50cmほどの焼土の固まりである。石4は集石2の東側に幅40cm・長さは2mほど続いて、さらに東側用地外へ続く焼土の固まりである。この辺の焼土は、集石1・2・3・4だけにあるのではなく、64号住居址の覆土が全面焼土であった。中世以降の遺物の発見はなく、焼土の中から縄文時代の石土器片・石器が出土するだけであったが、焼土の高さ・集石の形態等から、中世以降のものと考えられる。

中世と思われる遺物が出土したところは、集石群から2mほど西側にある土坑22の周辺で、片口形陶器の破片とふいご羽口の破片数点である。集石とつながる条件は何もないが、この辺りに中世の工房址があったと思われる。

② 溝址 1

調査地の北側、H地区の南の農道横線に沿って東側のグリットで北西から東南方向に横道沿いに続く溝址である。幅1.2m・深さ80cm(表土下1m)の箱堀状の溝址が検出されている。出土した遺物は中世陶器片2点だけである。

この溝址を報告で取上げる理由は、溝址に沿う横道は北西に進むと、伊久間城跡のある城ノ上で、昭和52年の立入り調査で、長径60m・短径50mに及ぶ長大な方形周溝遺構の存在が確認されている。この長大な溝址は、方形構成なのか、直線的な構成なのか不詳であるが、中世的な遺構の一つと思われる。この方形周溝の15mほど東南に溝址1が位置することから、伊久間城跡・長大方形周溝とかわりがあるかと思われるので、記載したものである。

③ 溝址 2

D2地区の掘立柱建物址3と105号住居址の南側を切りながら、北西方向から南東方向へ続く幅1.6

m・深さ50cmほどの溝址である。縄文時代・古墳時代の土器片の他は出土遺物はないが、切り合い関係・黒色土の幅土等から中世以降の溝址と思われる。

④ 溝址 3

C地区の西側で、古墳時代の住居址90・92号住居址を切って、南北方向に続く溝址である。この辺りは、台地が西へ傾斜しており、南側は農道3号線で掘り割られているので、末端は不詳であるが、北東側では、幅2m余、深さは60cmほどあり、碗状に掘り込まれた溝である。拳大の石が大量に積み込まれ、石の間から石器・土師器片・須恵器片・近世陶器片が出土している。時期的には比較的新しい溝址と思われるが、正体不明である。

平成7年のフルーツパークの用地内で、集石を持つ溝址が検出されている。方向は、台地を横切るように東北から西南に向いている。或は繋がるものかもしれない。

IV. 調査のまとめ

1. 伊久間原遺跡の広がり

経過・環境でも触れたように、伊久間原と言えば中央部の伊久間原遺跡・北側のハマイバ遺跡・下段の下原遺跡が含まれる。三者合わせると広大な地域で、中央部の伊久間原（中原）だけでも南北やく1300m・東西は広いところで300mほどある。2・3図にみられるように、昭和52年の畑灌水パイプ敷設工事に伴う立入調査の結果、伊久間原・ハマイバ地籍・下原地籍全体では345軒の住居址が確認されている。その内訳は、ハマイバ地籍は14軒、下原地籍は16軒、伊久間原（中原）では314軒である。（下原遺跡では、3回にわたる発掘調査が行われ、23軒以上の住居址が検出されているが、この数は含まれていない）

伊久間原遺跡では、立入調査結果314軒のほかに、昭和27年から平成7年までの発掘調査で33軒、今回の平成9年から11年の発掘調査された住居址100軒を含めると447軒の住居址が、検出されたり確認されている。この内、中央部から北側に、散発的に確認されている弥生時代後期の住居址5軒を除くと、南側やく500mの範囲に442軒が集中している。

昭和27年から今回の平成10年までの発掘調査で、検出・確認された住居址の数は133軒で、今回の発掘調査で検出された時期別の住居址数は、縄文時代前期8軒、縄文時代中期中葉16軒、縄文時代中期後葉39軒、弥生時代後期5軒、古墳時代中・後期32軒、平安時代2軒の合計102軒である。この他に、縄文時代早期の土坑が3基検出されているので、弥生時代中期の住居址が検出されないだけで、縄文時代早期から平安時代にかけての長期にわたる遺構・遺物が確認されたことになる。

昭和52年の畑灌水工事に伴う立入調査で確認された住居址の配置状況は、2・3図にあるように、伊久間原の中央部から南側500mほどの範囲に、それぞれの時期の住居址が、所を少しずつ替えながら集中していることが分かる。歴史的環境でも触れたように、縄文時代前期は、中央部から南側にかけてやく150mほどの範囲、縄文時代中期中葉は、北側から中央部にかけて200mほどの範囲、縄文時代中期後葉は、北側から南側にかけて400mほどの範囲で、最も広く広がっている。とくに、北側には径100mほどの範囲に、60軒以上の中葉・後葉の住居址が重複しながら円形状に並んでいる。中央部はやや稀薄で、南側に別の集合体がある。縄文時代後・晩期は、中央部南から南側100mの範囲、弥生時代中期は、最南端部100m以下の範囲、弥生時代後期は、中央部北側から南側の300mの範囲の中で、5か所ほどの6～7軒から10軒ほどの集合体がある。台地の北側には、1～2軒が散在している。古墳時代後期は、弥生時代後期とほぼ似通った範囲で平均的な広がりがあるが、中央部と南側に密集するところがある。中期は、中央部から南側へかけた100mほどの範囲に集中するように思われる。平安時代の住居址は全体的に少なく、南側に1軒、中央部に1軒、北側に2軒が散発的に確認されている。

今回の調査範囲は、中央部から北側一帯で、B・C地区は西側台地端に近く、D・E・F地区は、台地の中央部からやや西側に触れる位置を北に向かっている。縄文時代前期の住居址が、C地区からD2地区にかけて8軒と土坑・堅穴が検出されている。中央部から南側にかけて集落が存在するとすれば、北東縁の一部が検出されたと思われる。縄文時代中期中葉と後葉については、中央部のB・C地区では、中葉の住居址は5軒、後葉1軒で、土坑も中葉のものが多。北側のE・Fでは、後葉は

36軒・中葉も14軒で、大部分がE・F地区で、以前の立入調査結果を実証した結果のように思われる。弥生時代の後期の住居址は、C・D地区で4軒と囲溝址であった。これは予想外の結果で、中央部では東側に多く、西側に少ない予想を裏付けている。古墳時代の住居址は、C・D地区で集中的に検出されている。中央部の密集地帯を横切ったものと思われる。掘立柱建物址群が検出されたのもそのためと思われる。確実に古墳時代中期と思われる住居址はC地区に1軒で、南側に集中すると予想されることに合っている。平安時代の遺構は、E・F地区だけに留まっているが、住居址・工房址・掘立柱建物址・土坑が検出されたことは、E・F地区の西側一帯にこの期の集落の存在を暗示している。

以上のことから、昭和52年の住居址の配置予想を裏付ける調査結果で、この二つの結果を規範にして、今後の調査を進める必要があると思われる。

2. 特筆される調査の結果

約300mほどの範囲から、住居址やく100軒、掘立柱建物址22棟、縄文時代早期・前期、同中期・古墳時代・平安時代の土坑等が200基以上検出されたことは大きな成果である。中でも、縄文時代前期の集落構成、縄文時代中期の重複した環状集落の一環、古墳時代の住居址と掘立柱建物址の位置関係を知ることができたことは、大きな成果と思われる。

(1) 縄文時代前期の集落構成

前々から、伊久間原には縄文時代前期初頭の住居址群があることは、飯田・下伊那地方では希少なことで、大きな話題になっていた。(以前の記録では、縄文時代早期末と扱われているが、ここでは縄文時代前期初頭と扱っている) 畑灌水工事に伴う立入調査で確認された住居址は、21軒、同年行われた試掘調査で2軒、平成2年の下原地籍の悠生寮造成に先立つ発掘調査で7軒以上、今回の発掘調査で8軒の、合計38軒となる。発掘調査で検出された住居址は、17軒である。

伊久間原では、中央部農道2・3号線三叉路辺りを中心にして、やく200mほどの範囲にこの期の住居址が予想されている。農道3号線の東側にもあるが、西側台地端に近いところまで記録されている。それを裏付けるように、B地区では遺構の発見はなかったが、土器片は出土している。C地区では、87・101・104号住居址が検出され、用地外にかかる100・102・103号住居址が確認されている。土器片を多く出土する土坑も4基ほど検出された。東隣のD1地区では4基ほどの土坑が検出され、広い範囲から土器片が出土している。D1・D2地区では、119・114号住居址が検出され、土坑1・11、竪穴1・11・12等が検出されている。D2地区の114号住居址より北側では、遺構は勿論、土器片の出土はなかった。旧来の記録からみても、114号住居址を北限にして、南側一帯にこの時期の集落が構成されていると思われる。とくに、119号住居址は、竪穴の大きさはやく6m、掘り方も深さ60cmあって、地床炉も大きい。大きな柱穴は検出されないが、深さ40cmほどのピットが40個ほど方形に取り囲む、整った竪穴式住居址で、土器片も800点余、石匙・石鏃を含めて、黒曜石片300点余出土している。

(2) 縄文時代中期中葉・後葉の住居址群

E・F地区のやく70mほどの範囲で、縄文時代中期中葉の住居址14軒、縄文時代中期後葉の住居址36軒が重複して検出されている。中期中葉の住居址も、石囲い炉は小形・中形の2種類、土器も藤内系のものと、古手のもの等があり、2～3時期にわたる。古手のものは、南側D1地区まで広がるが、藤内系のものはD3地区までである。中期後葉の住居址も、諏訪地方で言う曾利のⅠ・Ⅱ・Ⅲ形式に当たるものが重複して、配置が片寄ることなしに並んでいる。このことは、この辺りから東南にかけて、環状に構成される集落の西北縁に位置するようで、少なくとも4～5時期の環状集落があり得るのか、大きな課題が投げかけられた調査結果と考えられる。

(3) 古墳時代住居址群と掘立柱建物址

C地区からD3地区のやく200mほどの間に、32軒の住居址と21棟の掘立柱建物址が検出されている。用地外に多くかかる住居址も15軒ほどあるから、はっきりしないが、他時期の住居址に半分以上重複する住居址は5軒、古墳時代同志の重複・接近の例は5軒で、半分以上重複する例が少ない。地域的にみるとC地区と農道三叉路辺りとD1・D2地区とその東西に密集するように思われ、見方によれば、C地区周辺からD3地区へかけて輪を描きながら並ぶ集団があるようにも思われる。この集団の中に住居址に接する位置、住居址と住居址の間にある空間を利用して、掘立柱建物址群があるように思われる。

21棟検出された掘立柱建物址群の中で、大形で整った集団は、D2地区南側の掘立柱建物址1～6、D2地区北側の7・11・13のグループである。D1地区・D3地区の散発的な掘立柱建物址も含めると、棟方向N50°W(±10°)前後のものは、掘立柱建物址1・2・3・7・8・9・10・11・13・20で、N60°W(±10°)前後のものは、掘立柱建物址4・6で、N0°前後のものは、掘立柱建物址12・15である。棟方向N50°W前後のものが大半を占めている。このことは、住居址の場合も同様で、棟方向が記録できた住居址25軒の内、N50°W前後のものは18軒、N60°W前後のものは4軒、その他・不祥も含めて5軒である。但し、棟方向N50°W前後の住居址18軒の内、土器形式から中期1軒、後期鬼高式古期14軒、同新时期3軒で、時期の違いとは言い得ない所もあるが、集落構成をみる一つの目安にはなる。掘立柱建物址を集団で構成するのか、個々の住居址と対になるのか、掘み得ない状況ではあるが、大きな示唆が与えられている。

長大な住居址の発見はないが、一辺8m以上の住居址は81・110号住居址だけであるが、以前の13号住居址を含めると3軒となる。昭和52年の記録によると、2～3軒はありそうで、それぞれ間隔を置いた位置にありそうに思われる。一辺5m以下の小・中の住居址も15軒あって、全体のやく半数を占めている。位置的にみると、大・小の住居址の組み合わせもあるように思われる。いずれにしても、未解明の問題は多々あるが、古墳時代の住居址・掘立柱建物址の位置・構成等幾つかの課題が見いだせたとと思われる。

(4) 平安時代の集落

今まで、伊久間原には平安時代の遺物発見が少なく、集落の存在は否定されていたが、昭和52年の立入調査で散発的ではあったが、4軒の住居址が確認されている。今回の発掘調査で、E・F地区で住居址1軒・工房址1軒・掘立柱建物址1棟・土坑4基以上が検出されている。場所がそれぞれ離れた位置ではあるが、出土した灰釉陶器には共通点が多く、同一集落の可能性が高いと思われる。以前の立入調査による4軒の内の2軒は、E地区またはそこに近いところであるから、E・F地区の北西側に平安時代の集落存在が有力になったと思われる。

北側のG地区でも、灰釉陶器片が2～3点收拾され、下原地籍の北側で、試掘調査の結果数片の灰釉陶器片が出土しているから、伊久間原とその周辺にも、小規模ながら平安時代の集落が存在する可能性は高くなったと思われる。

3. 伊久間原遺跡の立地条件

竜東地域の代表的な中位段丘は、豊丘村田村原・林原・伴野原、喬木村城原・帰牛原・伊久間原等が挙げられる。それぞれが、原始・古代の遺跡の豊富なところであるが、縄文時代早期から古墳時代・平安時代までの遺跡が重複するものは、田村原・伴野原・伊久間原である。中でも、縄文時代晩期・弥生時代中期を含めて、途絶えることなく大きな集落が形成されるところは、伊久間原だけになりそうである。しかも、伊久間原の場合は、段丘面全域に住居址が広がらないで、段丘面全体のやく半分、南側の500mほどの範囲に集中している。古墳時代の高塚古墳は、それぞれの段丘面の西側先端部には何基か構築されているが、東側の段丘崖下や上位段丘の先端部に古墳が構築されているのは伊久間原だけである。余程、生活に適した場所であったと想像されるが、それが何であるかは難しい問題である。

地形的にみると、帰牛原の場合は、加々須川左岸に発達した東西に長く続く段丘面であるが、伊久間原は、小川川の左岸に発達した、南北方向に広がる段丘面である。似通った段丘面は、豊丘村伴野原である。伴野原と異なることは、北側にハマイバ地籍、西側に下原地籍の一段低い段丘面を控えていることと、中央台地の東南側から南側に、台地を取り巻くように境の沢の溪谷があることである。この境の沢は、上位の大原段丘の崖下の湧水を集めた河川で、現在もこの湧水を利用した谷間の水田地帯が存在している。この境の沢の支流は、東北方向の大原段丘崖下と伊久間原台地の中間低地へつながっている。土地改良事業によって平坦化され、低地地形を観察しにくい状況であるが、昭和27年頃には、「あんま井」・「古井」には湧水があって、境の沢に流れ込んでいた。雷雨等があると、この低地は川と変わり、境の沢の先端部へ落ち込んでいた。この沢の先端部は、2mほどの落差があって、年と共に崩落が進み、侵食面が東へ伸びていく状態であった。現在では護岸工事のためにその姿はみられないが、1000年単位で想像すれば、境の沢の侵食は相当進んでいるものと思われる。集落構成の中心地南側では、境の沢に面するところは急崖で、崖縁一帯では遺物が多く採集される。確かめた例は今のところないが、住居址等の遺構が削り取られた形跡があるように思われる。そうすると、この境の沢や、東側に続く低湿地の存在は遺跡立地に大きな条件を備えていると考えられる。縄文時代は

ともかく、弥生時代・古墳時代の集落が、境の沢の溪谷・低湿地帯に沿うように構成されていること、弥生時代の中期の集落が南端部に集中し、やがて北側に広がっていることも、境の沢の侵食状況と関連するように思われる。弥生時代後期・古墳時代の生産地域を、境の沢の東側一帯の低湿地を利用したことは間違いないと思われるが、同一時期構成戸数30戸と推定した場合に、水田耕作面積の確保は可能であったか、ほかに畑作等の生産地を求めたかどうか、残される課題も大きい。現在のところ、境の沢につながる低湿地帯や、赤坂古墳の立地する入道洞に接する扇状地面の基礎調査は少ないのが現状である。「地形地質から見た伊久間原の自然環境」の報文には、この課題解決の糸口が示されている。とくに伊久間原中央部（中原）と赤坂地籍の地形地質調査は、画期的な機会であっただけでなく、中央部（中原）と境の沢地域の段丘形成過程の中で、古代集落の立地条件の良さが究明されたことは、大きな成果であった。とはいってもこの究明調査は緒についただけであるから、松島さんが言われているように、プラントオパールの測定調査、地形地質調査、遺物散布の悉皆調査等、計画的に行いたいところでもある。

4. 伊久間原遺跡の保全 活用計画

喬木村では平成12年に、農家個々で経営する農業から、全体を村外からの人材も結集させる地域経営体による農村公園構想づくりが研究されている。まとまった構想は、伊久間原の農業形態をモデルにして、全村の農業と、地場産業との連携、豊かな自然・村の歴史や文化を生かした多様な余暇活動（遊び・学習・体験）の場を創造・提供することを主眼としている。

伊久間原遺跡活用基本計画委員会も結成されて、伊久間原とその周辺の活用方法が研究されている。幅広い構想の中で、この稀有な大遺跡が幅広い将来計画の中で生かされたらすばらしいことである。伊久間遺跡だけでなく、伊久間城跡・水防土堤・奴山古墳群・藤塚古墳・城坂観音群等を含めた遊歩道計画、古代の植生の再現、古代村の体験広場等夢の広がる地域であるから、英知を集結していただきたい。

写 真 图 版

写图 1 C地区全景



写真2
D1・D2地区全景



1. 北から

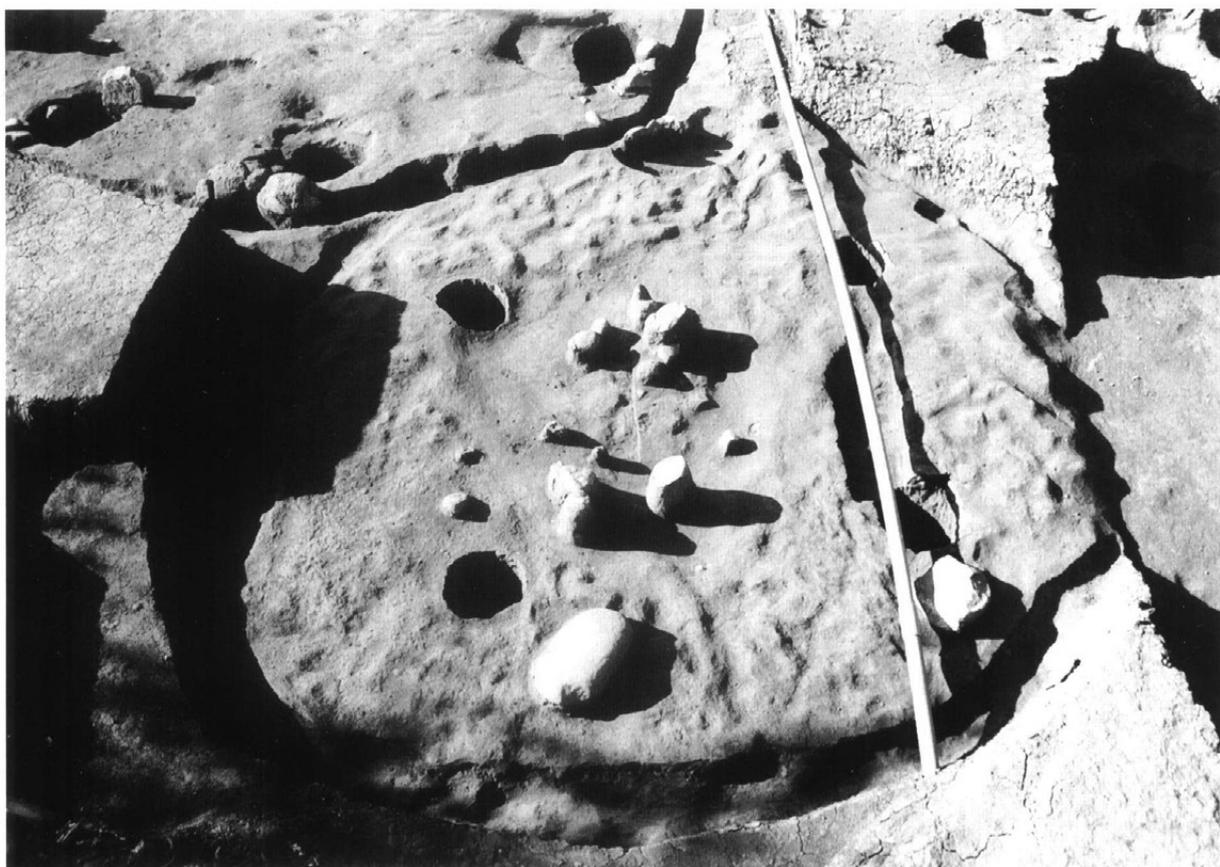


2. 南から



写图3 E·F地区全景

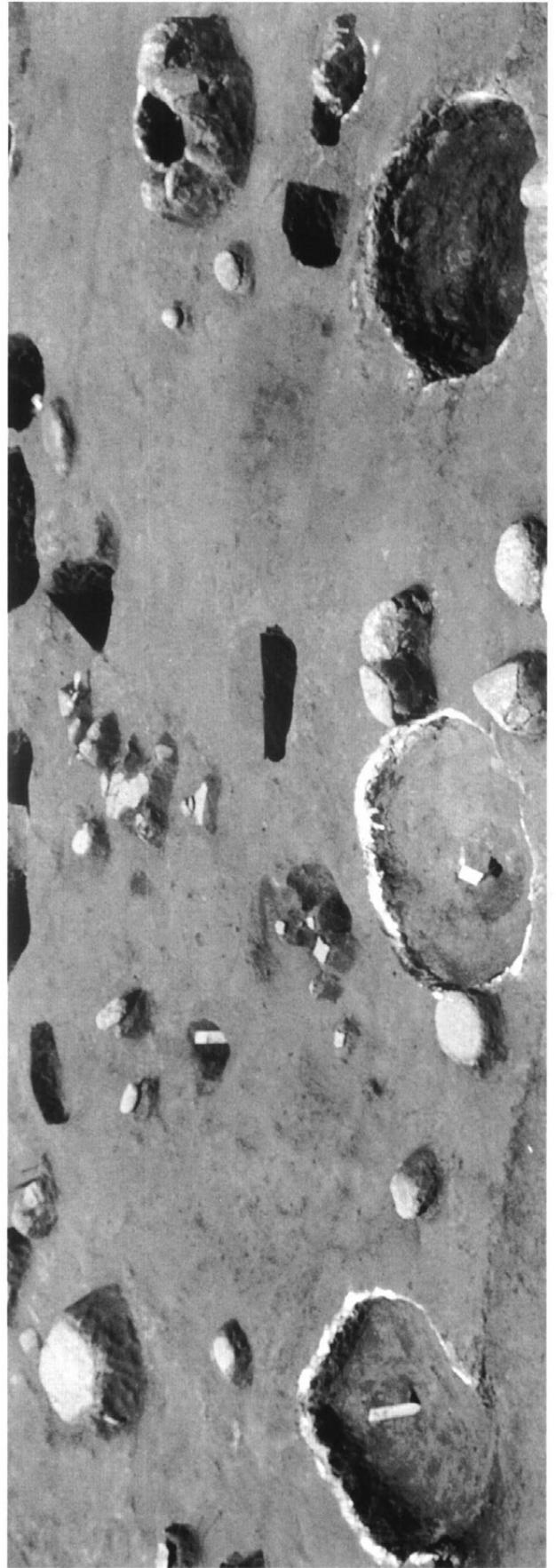
写图 4
87 · 101号住居址



1. 87号住居址



2. 101号住居址



写図5 119号住居址と掘立柱建物址ピット

写図6
118・119号住居址



1. 118号住居址



2. 119号住居址



1. 108・129住、竪穴4・12との重複



2. 埋鉢炉の断面



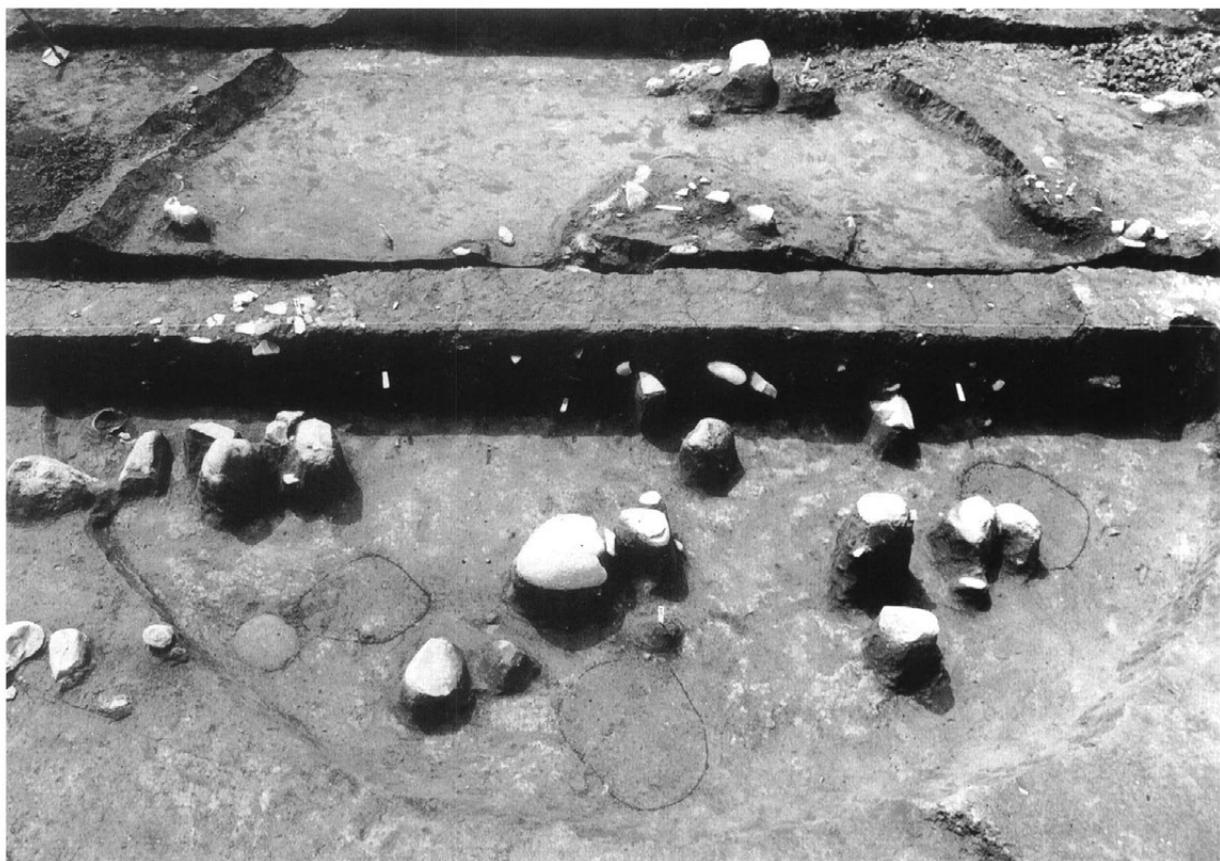
1. 上層の土器出土状況



2. 52号住、土坑12・13の重複



1. 46住 44住
47住 45住 34住



2. 土器出土状况

写图 10
49号住居址



東側土器出土狀況



1. 77号住居址



2. 63 · 64号住居址

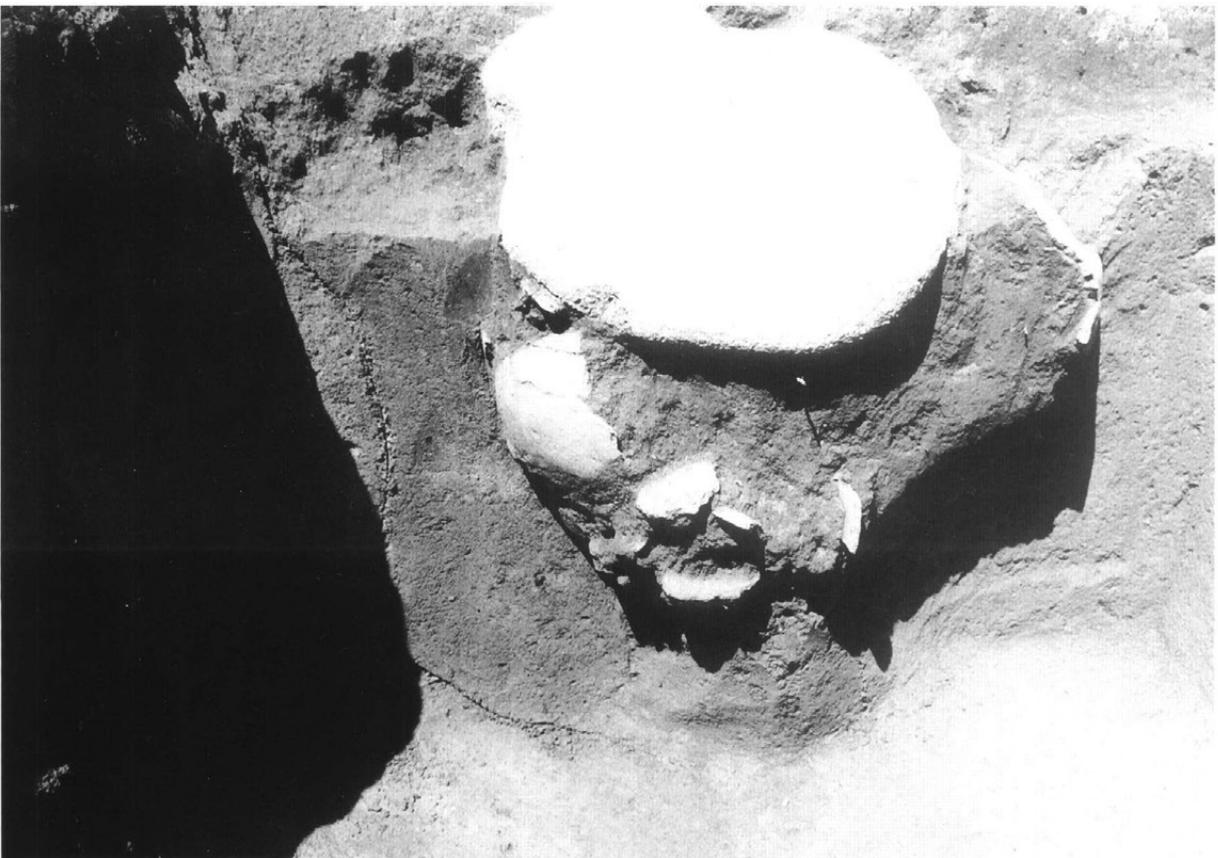
写図12
67号住居址



炉と東側の土器出土状況



1. 79住

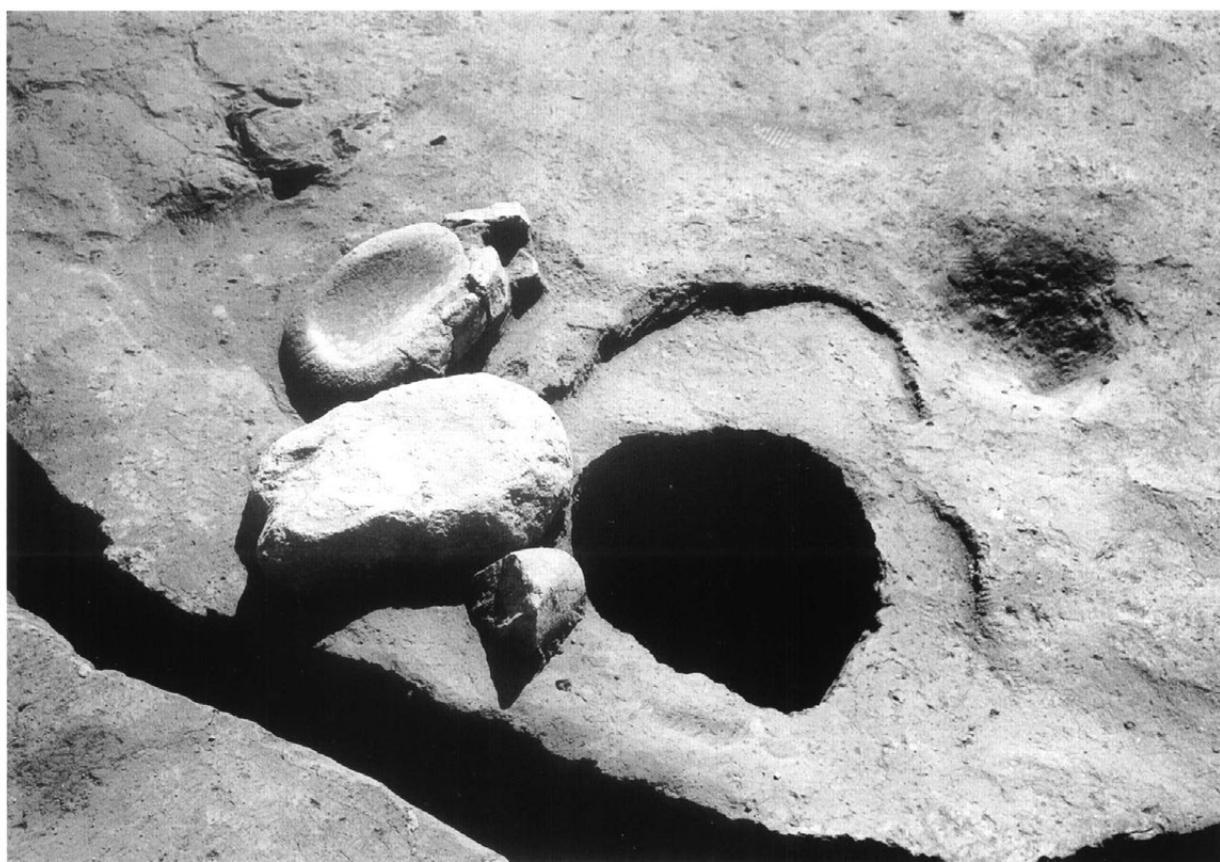


2. 埋甕の出土状況

写图 14
89号住居址
(1)



1. 全景



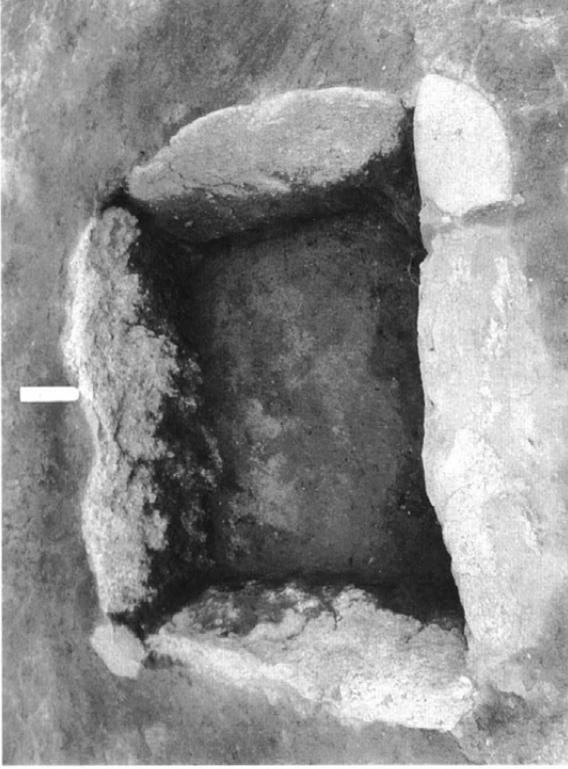
2. P4と石皿出土状況



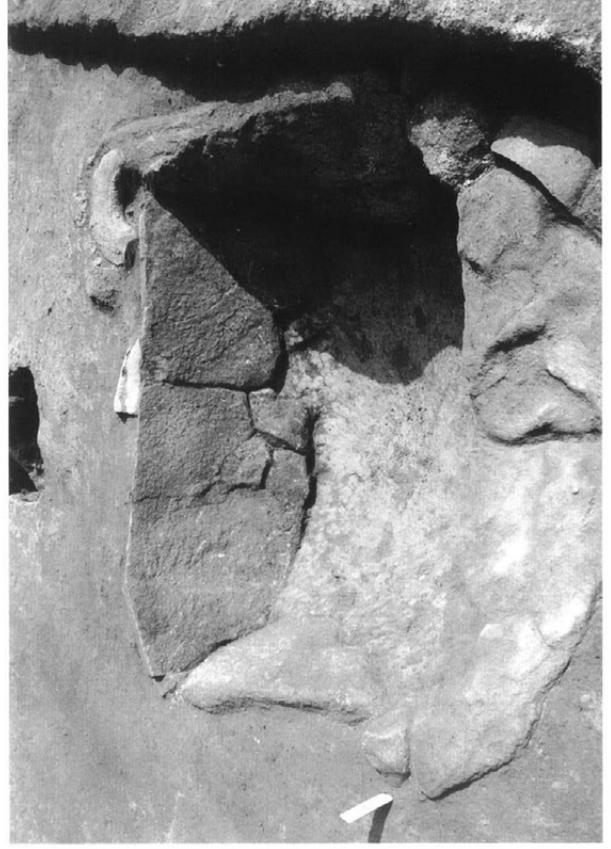
1. 石棒と埋甕



2. 香炉形土器と石皿



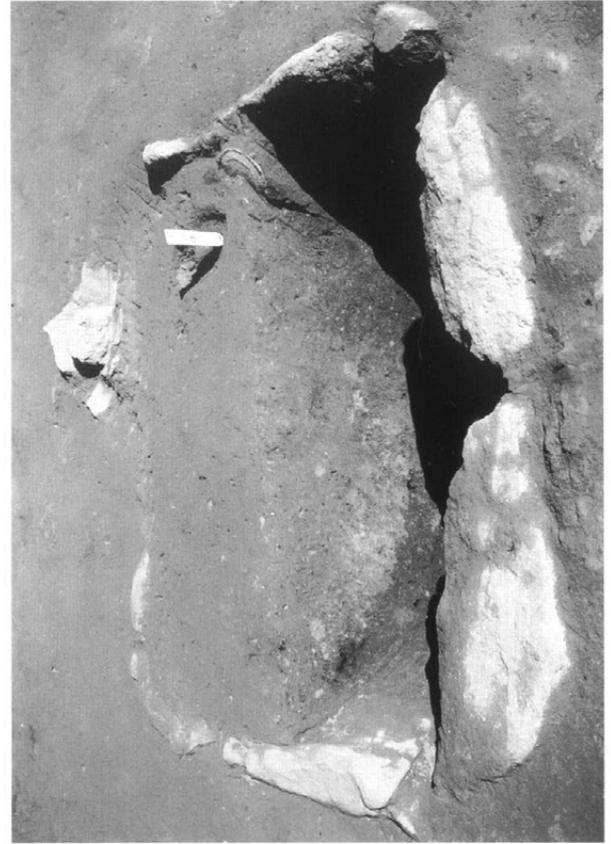
2. 38住



4. 79住



1. 45住



3. 89住

写図 16 38・45・79・89号住居址石囲い炉



1. 48住



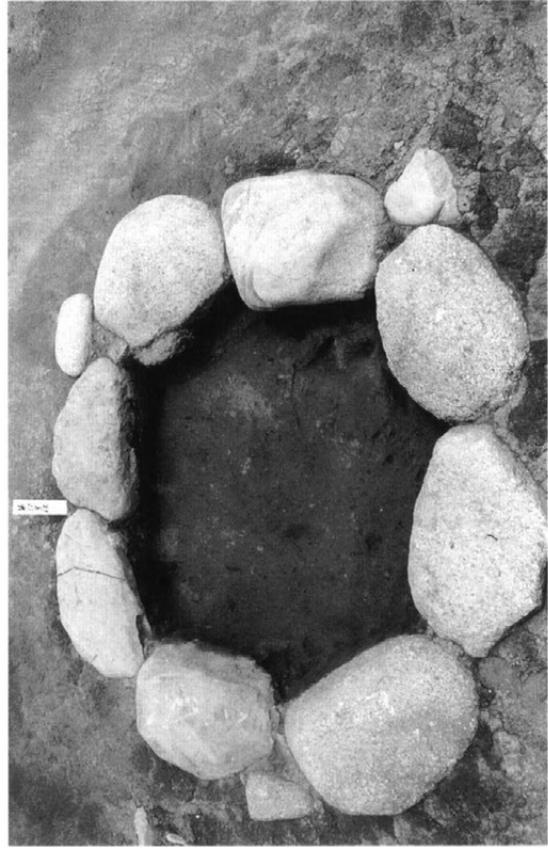
2. 49住



3. 77住



2. 67住



4. 52住



1. 46住

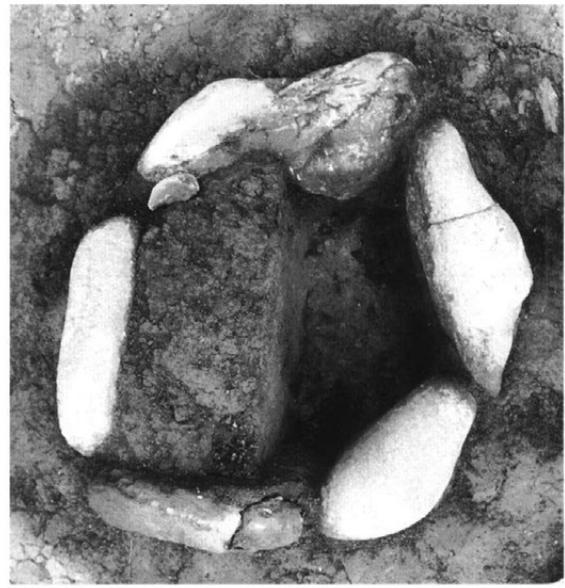


3. 40住

写図 18 40・46・52・67号住居址石囲い炉



2. 69住



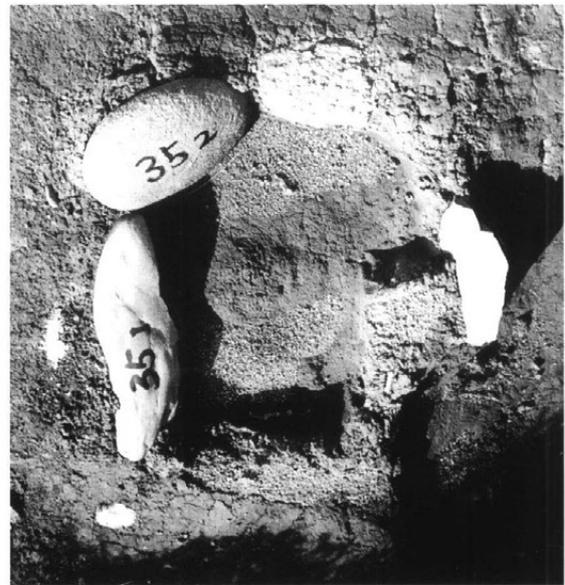
5. 112住



1. 53住



4. 76住



3. 35住

写図 19 35・53・69・76・112号住居址石囲い炉

写图 20
38号住居址埋甕

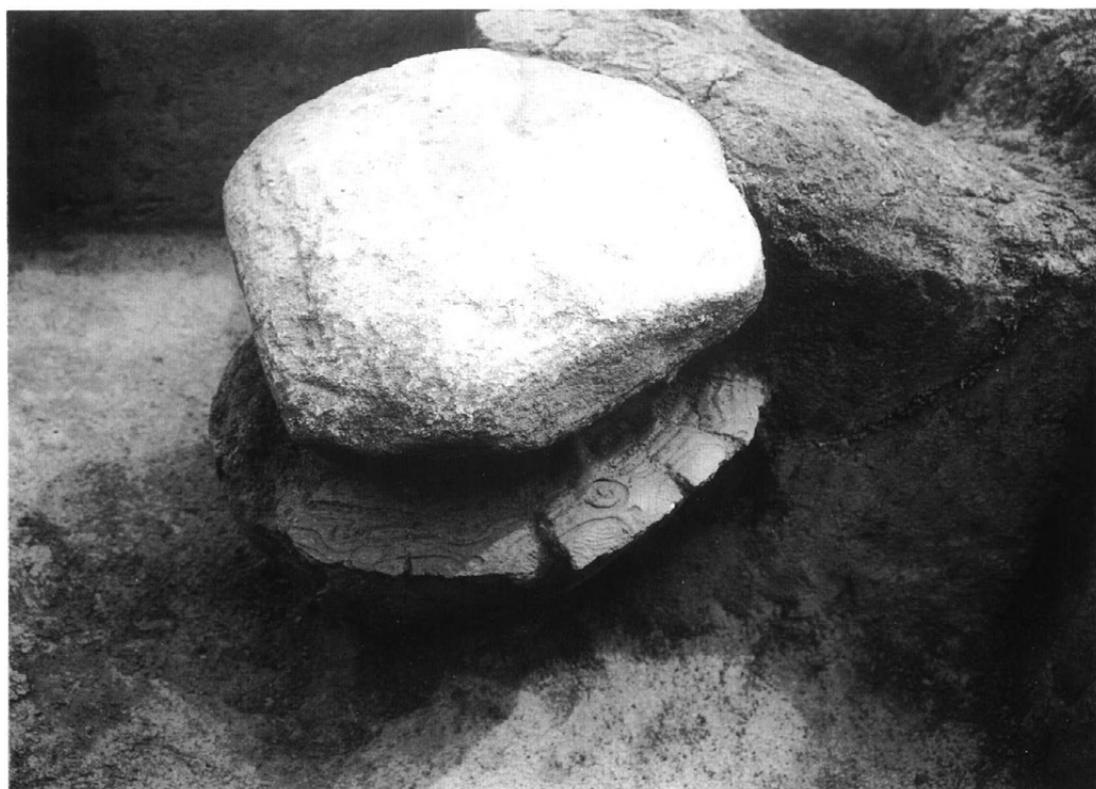




写图 21 45号住居址埋甕

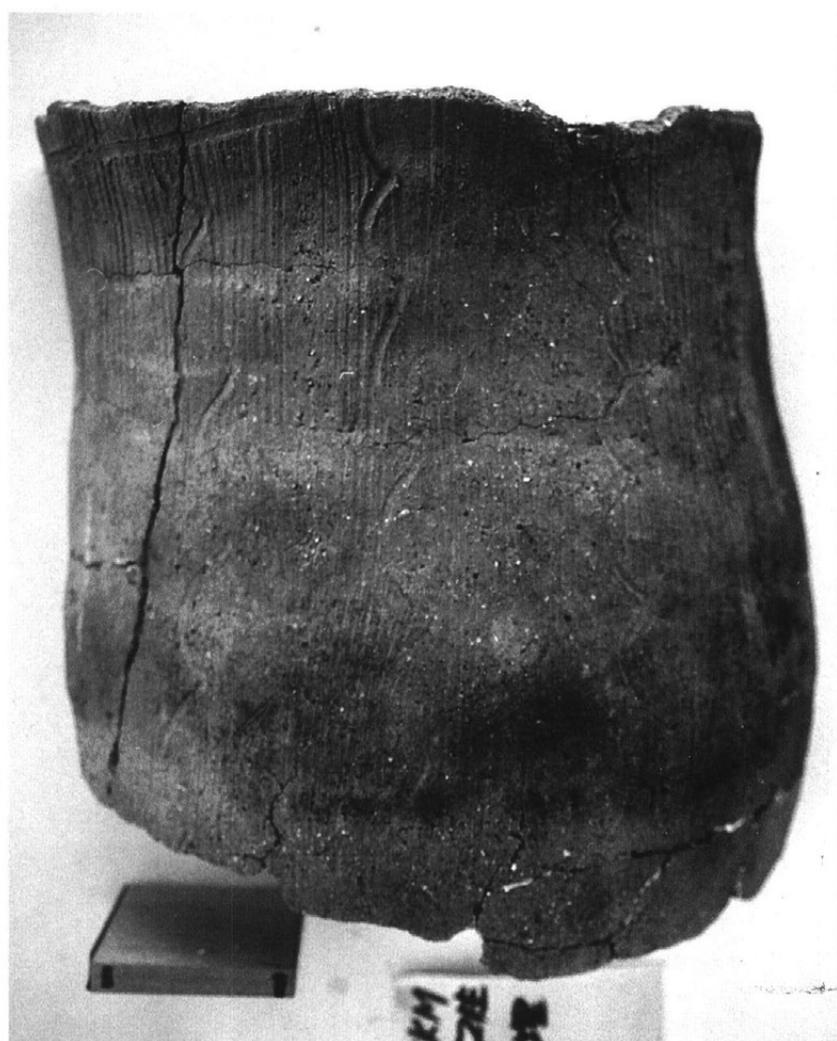


写图 22
49号住居址埋甕





写图 23
52号住居址埋甕



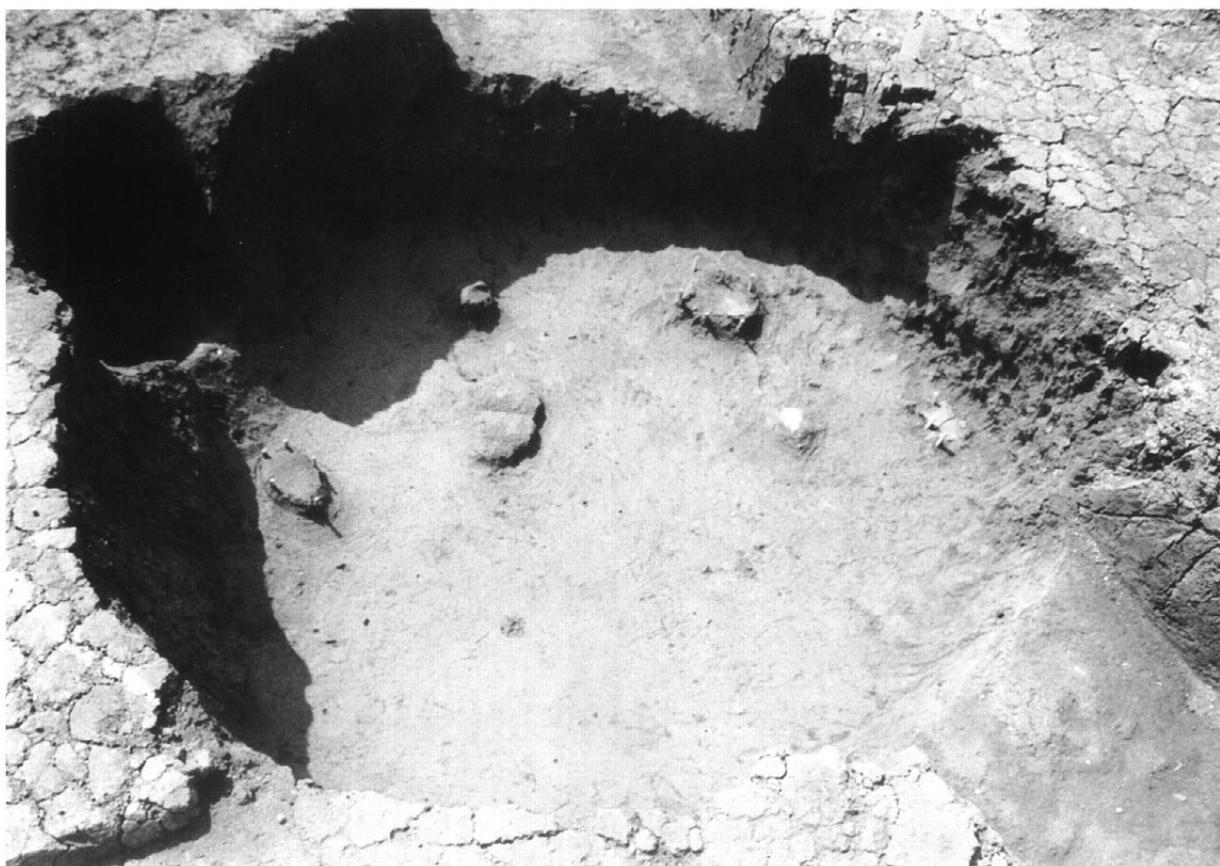
写图 24
77号住居址埋甕





写图 25
89号住居址埋甕





1. 竖穴 7



2. 竖穴 10



1. 土坑 1



2. 土坑 20

写图 28
E地区竖穴群





1. 全景

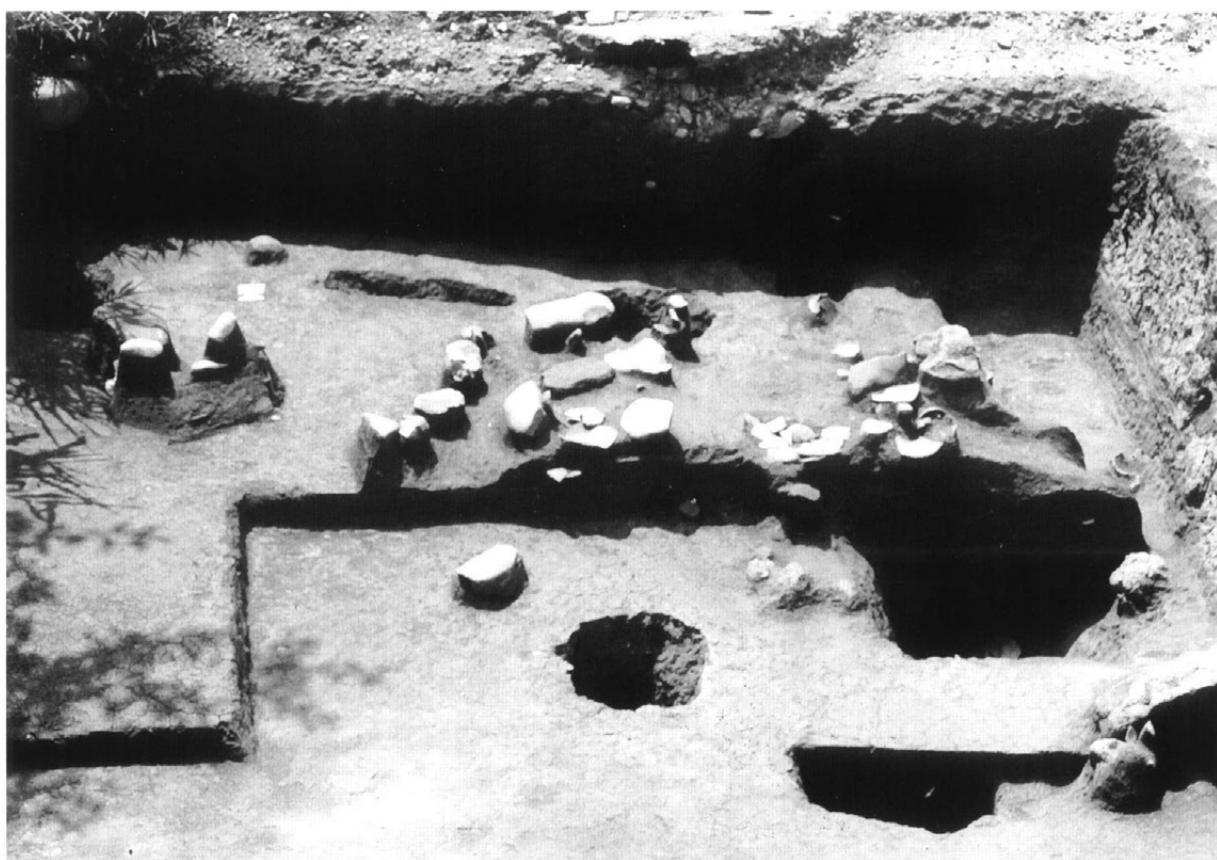


2. 埋甕炉と土器出土状況

写図 30
68号住居址



1. 南から

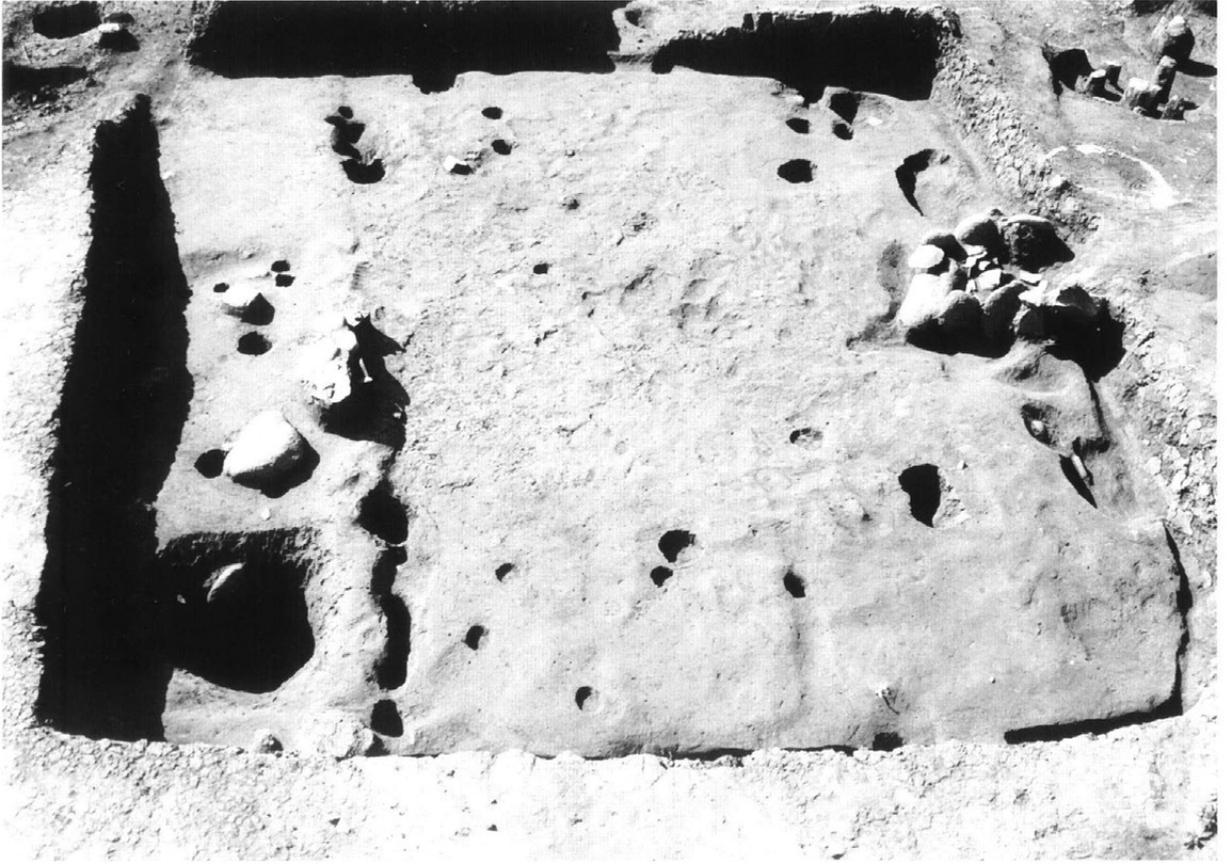


2. 北から (二重構造)

写图 31
82号住居址



写図 32
85号住居址



1. 東から



2. 遺物・炭化物出土状況



1. 全景



2. 炭化材出土状况

写図
34
88号住居址



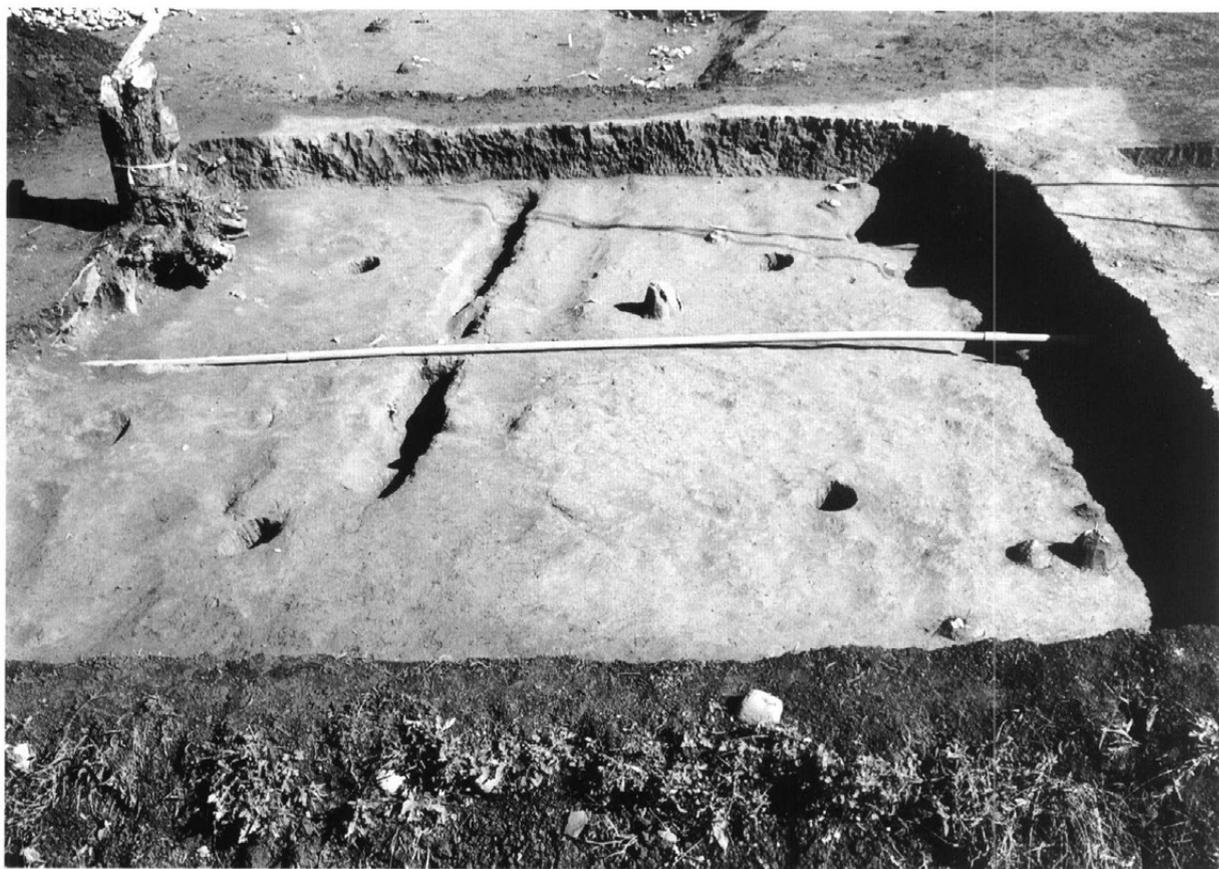
1. 北から



2. 炭化財 (1650±40年)

写图 35
90号住居址





1. 92号住居址



2. 107号住居址

写图 37
108号住居址

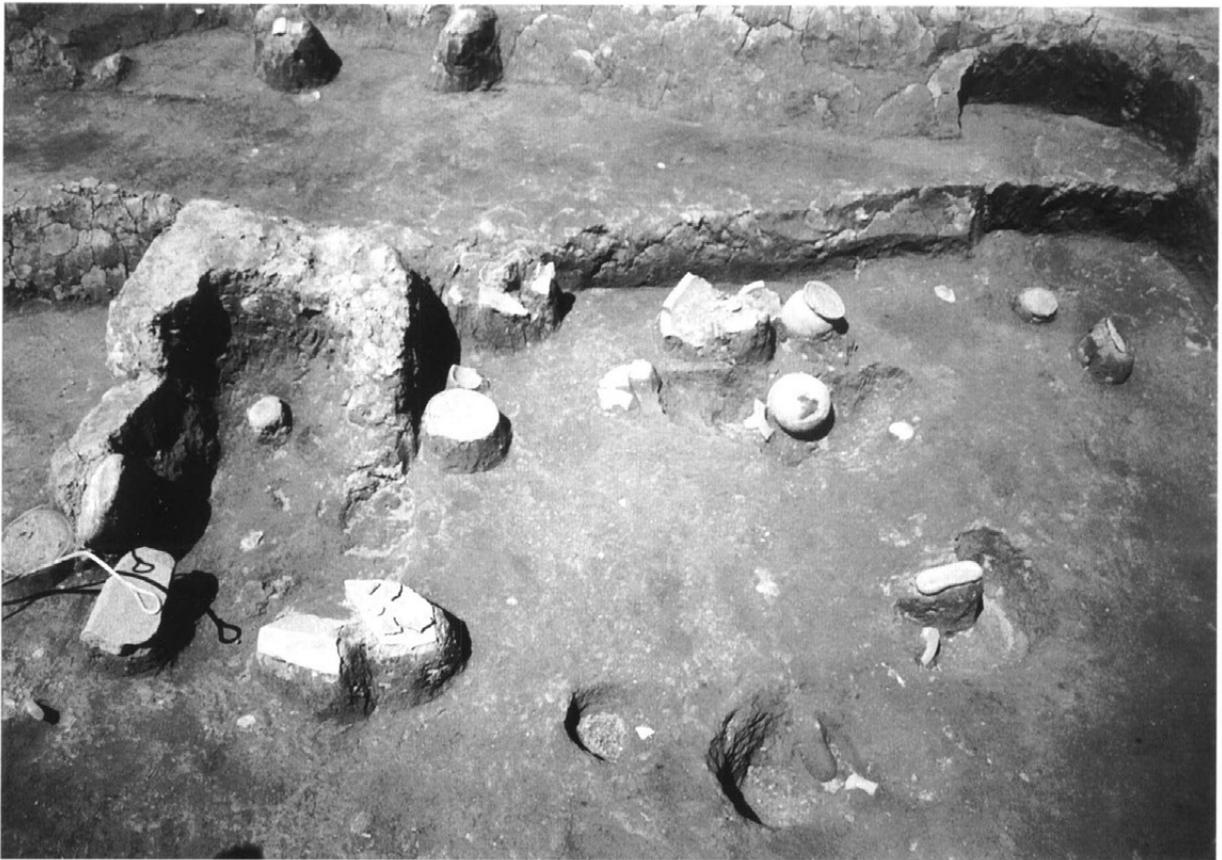
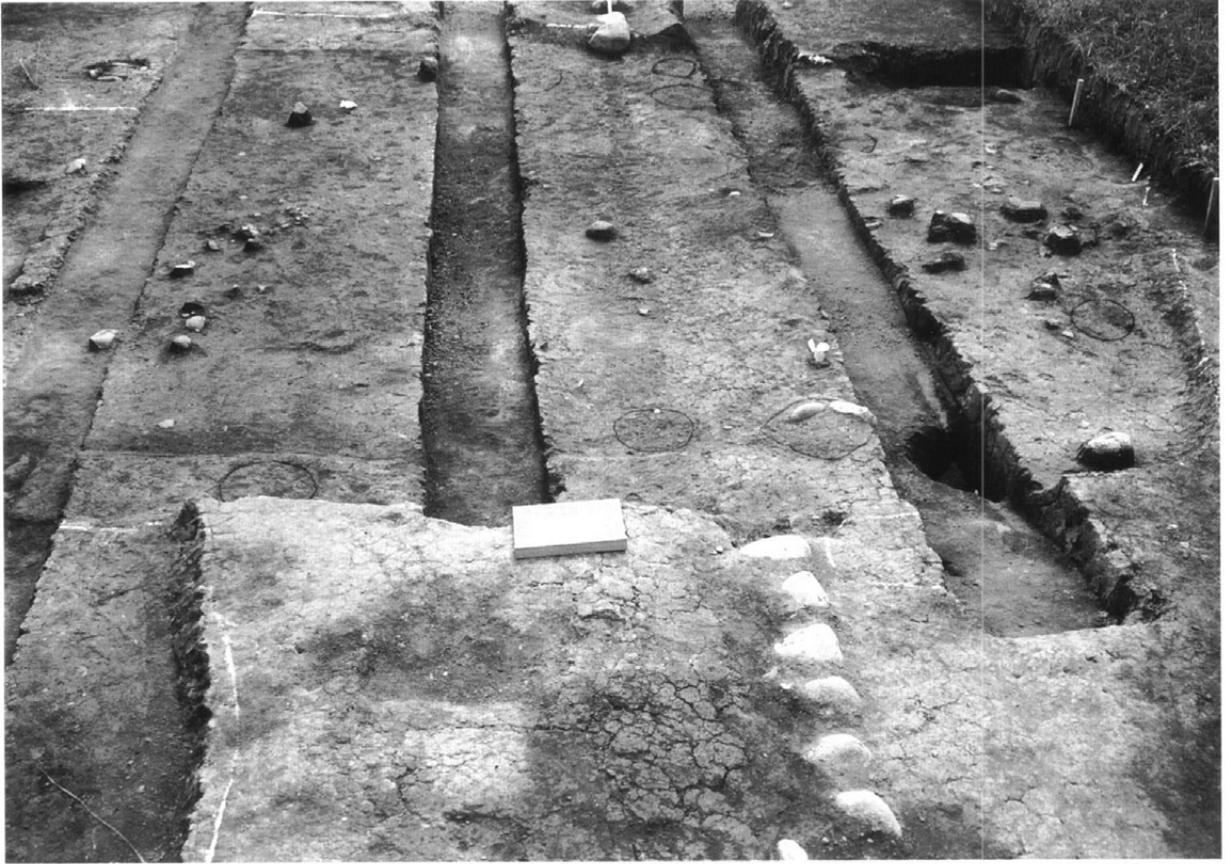
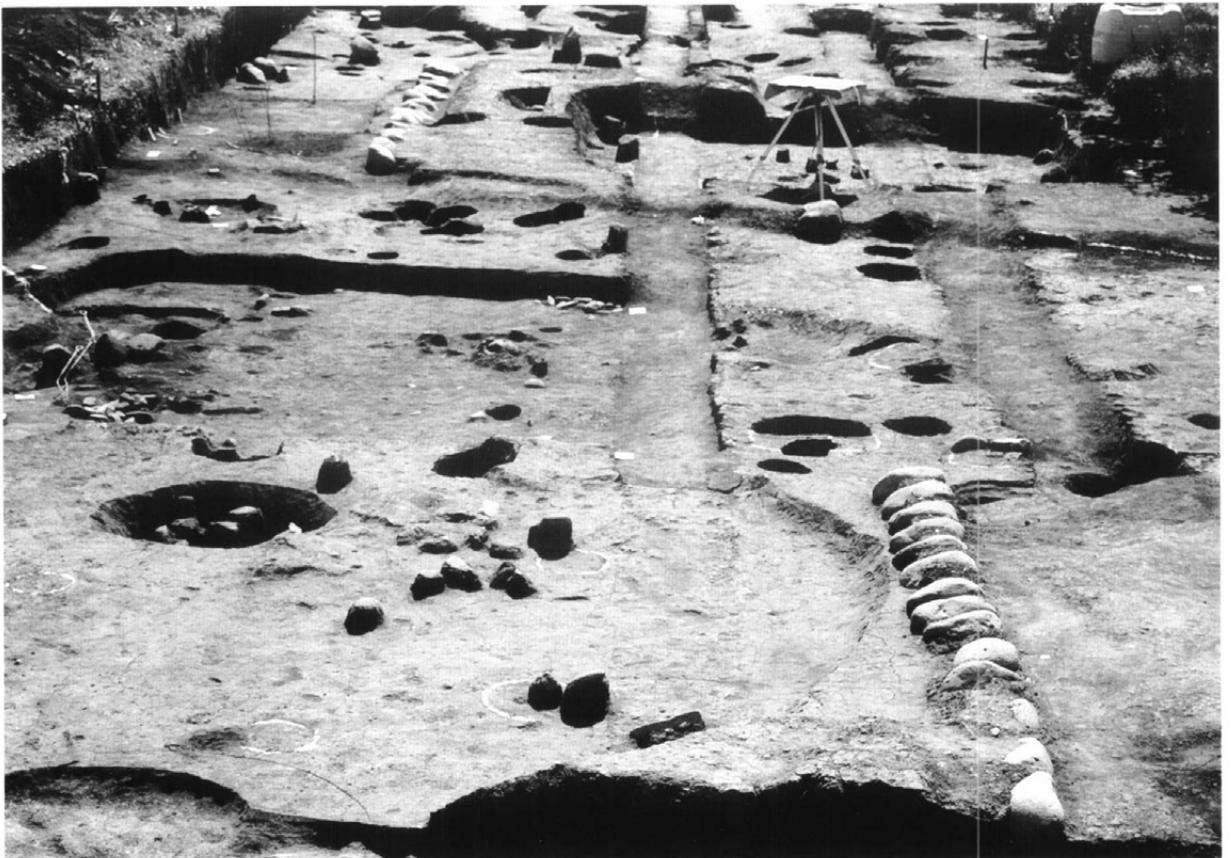


写真
38

110号住居址



1. 北から



2. 114・130号住との重複状況

写图
39

117号住居址



写图
40
121号住居址



1. 121住



2. 茅炭化物出土状況



1. 122住



2. 東隅土器集中か所

写图
42

123号住居址



東側炭化材出土状況

写图 43

130号住居址



西隅孤手石出土状况



1. 1号住居址

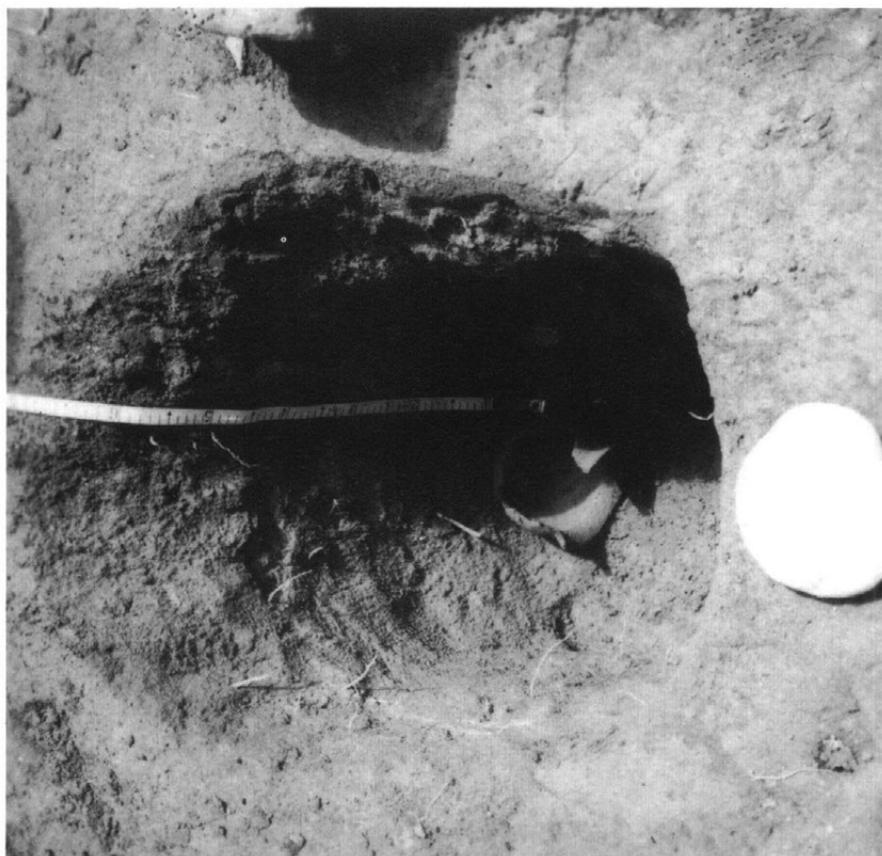


2. 13号住居址「かまど」復元落成の日（昭和29年）
左上に奴山古墳の松が見える

写図45 1号住居址の調査



1. 田中豊春先生と今村



2. 小形甕形土器の出た貯蔵穴



2. 煙道

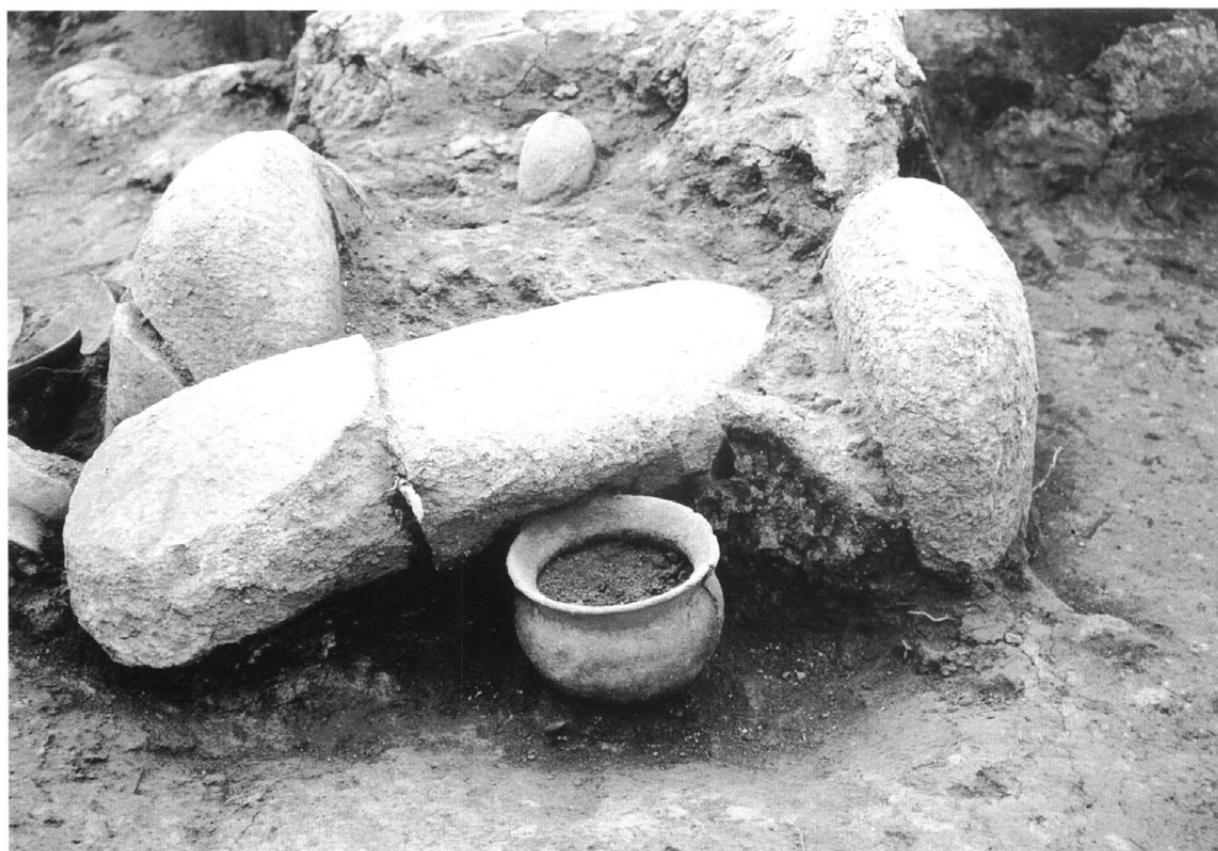


1. かまど全体

写図 46 13号住居址のかまど



1. 82号住居址



2. 86号住居址

写真
48

107・
123号住居址かまどの正面



1. 107号住居址



2. 123号住居址



2. 108号住居址



1. 123号住居址

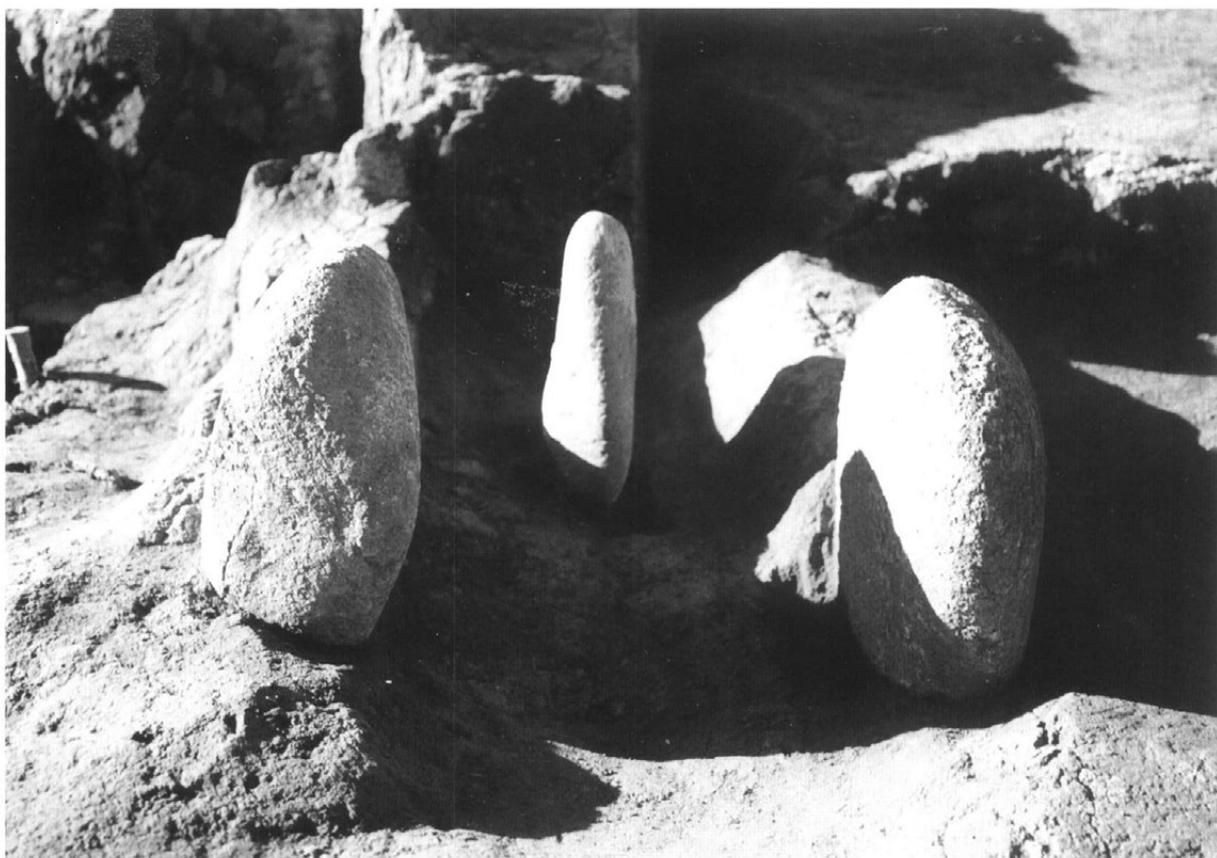
写図 49 108・123号住居址かまどの上面



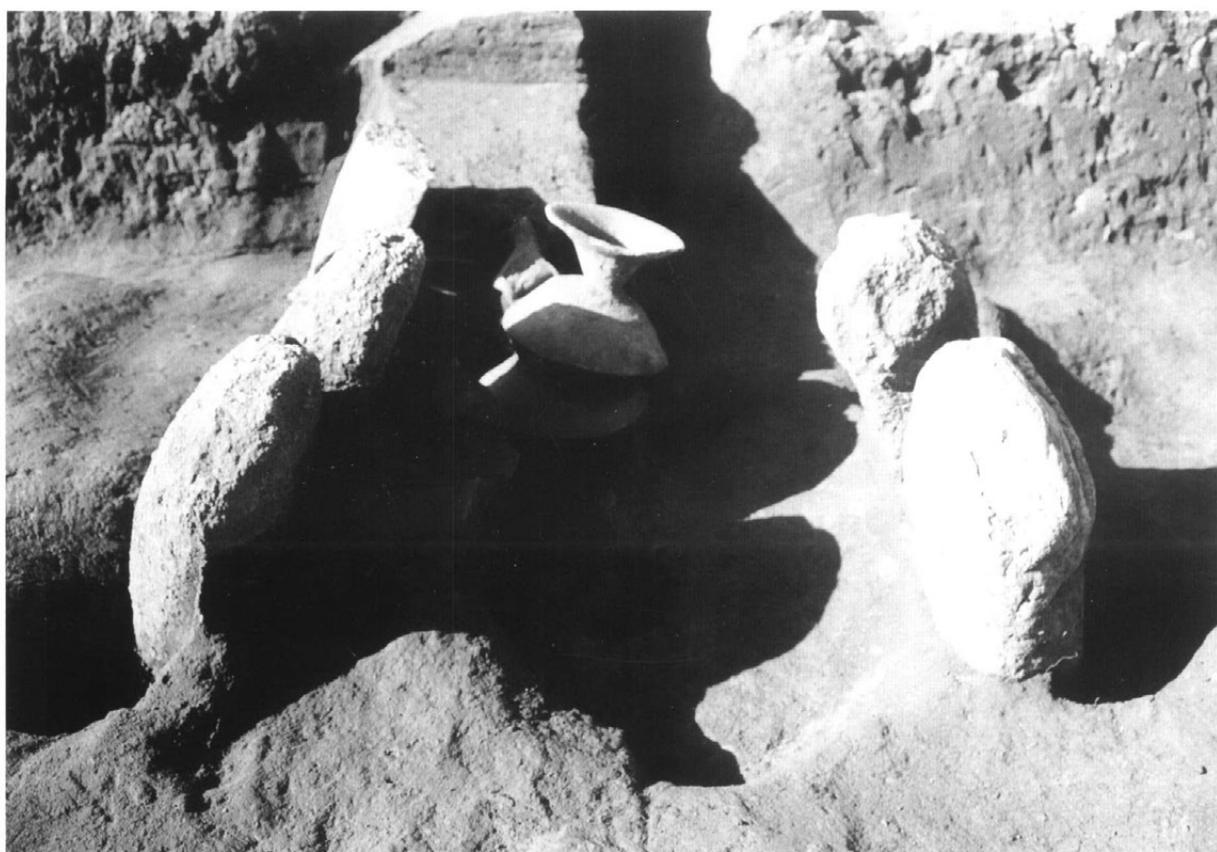
1. 85号住居址



2. 88号住居址



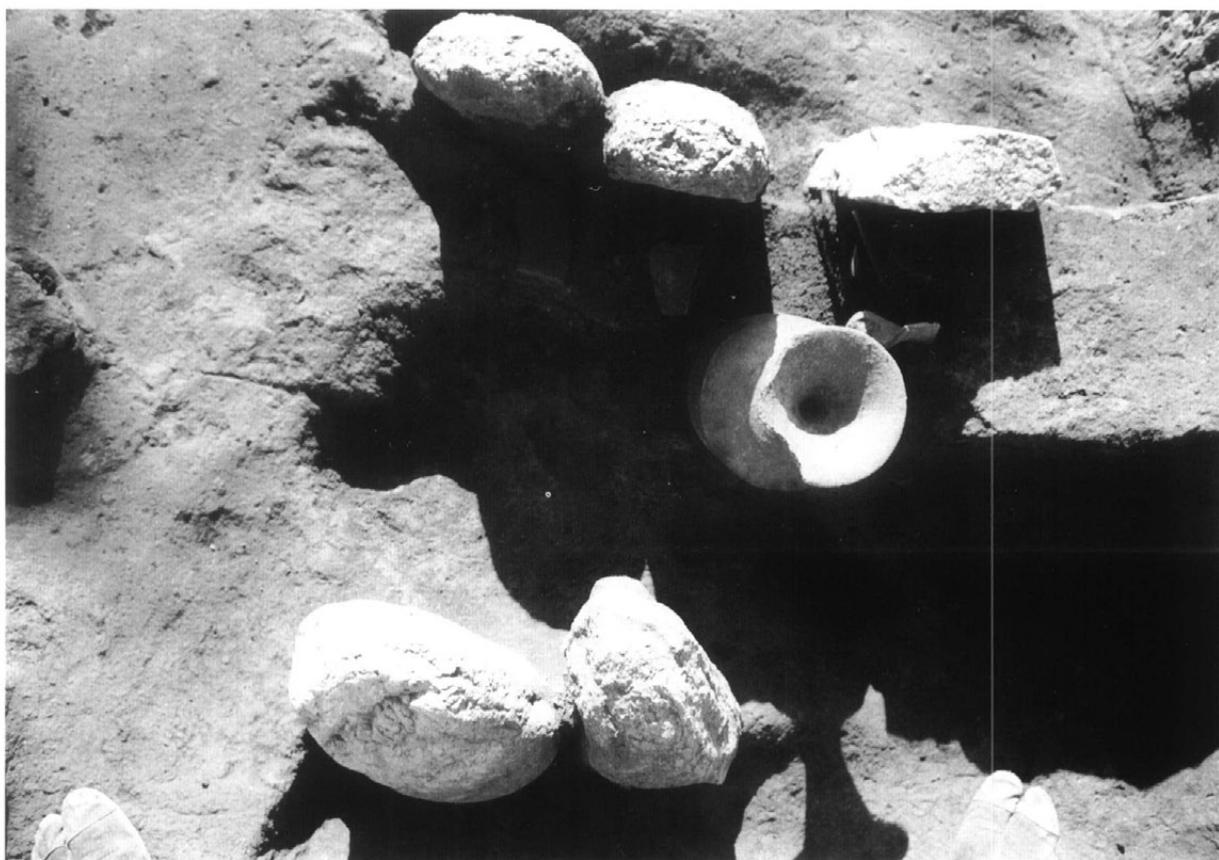
1. 86号住居址かまどの石の支脚



2. 88号住居址かまどの高坏の支脚

写図 52

88号住居址かまど支脚の高坏形土器





2. 121号住居址



1. 68号住居址

写図 53 68・121号住居址粘土製のかまど



1. 85号住居址（高坏が多い）



2. 86号住居址（高坏・甕・甑）